明治二十九年

女學雜誌

六月
刊行

第四百貳拾參號目次

明治女學校新築費募集廣告

謹んで吾國同胞兄姉諸君に訴ふ。弊校十年の志望を守り、倍々女學に盡瘁せんことを期念し、速に新校舍の與へられんことを祈る。冀くは、有志同情の諸君、之に對して義捐せられんことを。

明治廿九年二月

東京麹町區下六番町六番地

私立 **明治女學校**

右取次……女學雜誌社……

特別廣告

岡山孤兒院より『金八圓拾貳錢六厘』を寄附せらる。是れ實に汗血斷食の餘滴なり。之を受けて感激不能禁、特に之を別途の積立とし本校基本金の基礎となす。冀くは、四方有志の諸君、亦た別途の義捐を寄せて、此が上に積加せられんことを。

私立明治女學校新築費募集の告白

明治女學校は今を距ること十又二年(時正に明治十八年八月)世間未だ吾國人の私立に成れる女學校あらざりし時木村熊二、島田三郎、田口卯吉の諸氏其他及び不肖善治が發起創立したる者也。之より先き女學校の官立に成るもの若くは外國宣教師諸君の設置に係る者はありしが、民間士人獨立の力を擧げて新文明と吾國風とに適應したる女學校を開設せしものはあらざりし也。此に於て諸氏慨然として此發起あり、爾來十又二年、初一の精神を貫き、官に倚らず外國會社の補助を要めず、單に同情同感ある吾同胞國民に訴へ、周圍窮乏の間に漸やく發育して卒業生を出すと一百四十名に超え、多年の精神次第に貫徹して今や全國到る所に校友あらざるはなし。就中三井銀行の諸氏は久しく懇志を垂れ昨年に及では、三井高保氏金三千圓を寄附せられ、其他某々の諸氏(其の名を公にするを好み玉はず故に明記せず)尤も同情を垂れて内外の助勢漸く加はり、此年に在て吾明治女學校は俄然一段の發達を遂げ前途の春色大に動きて將に近く爛熳たる光景を呈せんとせしに、今茲一月五日、隣家火を發し不幸類燒の厄に會ひ、校舍別舍、教師館、忽然として烏有に歸し、藏書器械悉皆燒滅し、多年の經營一朝にして焦土となりぬ。然れども、吾等が女學に對して感慨する所は尋常にあらず、素より一敗の故に挫折すへけんや。今や吾等が職責は寧ろ一層重大となれるを覺ゆ、則ち彌よ奮つて倍々斯道の爲に彈射盡力せんことを期圖するの念や勃々たり。幸にして三井家再應の助力により同番地内の殘舍を假用して授業を續くることを得、災後十日既に讀書の聲を復し現に依然として平日の如くなるも、速に新校舍を再築し器械を整頓し四方の望に副んことを熱望すると太だ切なり。仰ぎ願くは吾國同胞の諸君、徐ろに吾等十有餘年の經營を吟味し、一片の赤誠只唯だ斯道に盡瘁せんことを望んで他意なきの情懐を察せられ、幸に義捐を寄せて校舍再築の擧を助けられんことを謹て切願す。

明治二十九年三月

東京麹町區下六番町六番地

私立明治女學校々長

巖本善治

明治女學校新築費義捐廣告

第一回報告

東京芝櫻川町

氏名	住所	寄附
馬越恭平殿		金五拾圓也
伯爵大隈重信殿		號鐘及鐘樓
伯爵勝安房殿		武道々場
伯爵勝安房殿		絹地揮毫數百枚
鈴木其一殿	東京九段阪	教場一室
文學音樂會	東京神田	音樂教場一室
伊藤為吉殿	東京神田三崎町	金五拾圓也
大脇克信殿	土佐國高知	金貳百圓也
猪股吉平殿	東京西黒門町	金五拾圓也
友人某殿	東京日本橋區	金壹百圓也
丹羽賛殿	名古屋	金參拾六圓也
佐々木雪殿	東京神田	金參拾六圓也
福永文之介殿	東京出雲町	金拾圓也
石田祐安殿	仙臺東北學院	金五圓也
蘆原信之殿	臺灣兵站軍醫部	金五圓也
順正女學校有志	備中高梁	金拾圓也
宮城女學校文學會	仙臺	金五圓也
共愛女學校有志	上野前橋	金壹圓拾錢也
遺愛女學校有志	渡島函館	金拾五圓四拾五錢也
梅花女學校有志	大阪	金拾四圓五拾貳錢也
英和女學校有志	福岡	金參圓也
奥秀三殿	東京	金拾八圓也
原田光三郎殿	下野足利	金拾八圓也
坂木武殿	東京築地	金拾六圓拾四錢也
川岸とう殿	東京	金拾圓也
池田四郎二郎殿	東京牛込	金五圓也
岩沼教會婦人會	陸前	金三圓○八錢也
ハーツホルン殿	東京築地	金拾圓也
中上川エン殿	東京	金五圓也
大竹英殿	越後	金壹圓也
小野坦殿	石狩國上川郡旭川	金壹圓也
志田壽三殿	札幌	金拾圓也

氏名	住所	寄附
倉田又鼎造殿	神田三崎町獨英學舍	金拾八圓也
増田増造殿	横濱本町四丁目	金百三拾六圓也
増田瀧子殿	同	金三拾六圓也
増田嘉兵衛殿	同	金拾八圓也
増田ふみ子殿	同	金拾八圓也
中川嘉兵衛殿	東京越前堀	祈禱之家
齋藤音作殿	越後	金九拾圓也
新海榮太郎殿	甲州中巨摩玉幡	金五拾圓也
安藤太郎殿	東京麻布	金四拾圓也
牛込教會員	在信州	金貳拾圓也
高橋久野同系子	佐渡河原田町	金拾圓也
中山光子殿	同	金五圓也
岡山孤兒院	備前岡山	金八圓拾貳錢六厘也
山口仲之介殿	信州長野町	金貳拾圓也
山口よし子殿	同	金四拾壹圓也
無名女史殿	在札幌	金拾圓也
三戸より子殿	大阪	金參拾八圓也
氏家玉井子殿	山口	金參拾六圓也
中村修一殿	東京民友社	金貳圓也
木村夏子殿	上州桐生町	金貳圓五拾錢也
安藤ふく殿	箱根宮の下	金壹圓也
百瀬玄淡殿	土佐高知	金拾圓也
ミス、ゲッブ	米國	金四圓也

明治女學校基本金廣告

東京鐘ヶ淵紡績會社工女夜學校有志生徒二百二十六人の諸氏は弊校の志望に感激すとて金拾八圓五十錢を贈らる、亦是れ其の賃銀の貯蓄より成ると云ふ。則ち、岡山孤兒院の義捐と同じく本校基本金となし、永く其の非常の芳志を紀念す。

女學雜誌

第四百貳拾參號

明治二十九年六月二十五日發兌

社說

天災の解

天氣非常なれば自から責め、疾風迅雷あれば襟を正うする是れ道に寅畏するものゝ覺悟に非ずや。理學を講ずるもの則はち冷然として曰く、天候風雷の變化は、空氣陰陽の動作に因りて生ず、其の起るや云々なり、其の治まるや斯々なり、經路の理解明白なるを得べし、亦何んぞ迷信を許さんやと。而して、此を以て文明の論となし、十九世紀理學の進歩驚ろくべしと稱す。嗚呼、噫、文明の理學なるもの、安んぞ只だ斯の如き淺薄なる造詣にして止む可んや。人の歩むを見て、これ筋肉の動作によると言ひ、人の叫ぶを聞て、これ聲音の發作なりと言ひ、單に生理々學の解釋に止めて而して究極の心意情操を問はずんば如何ん。如此くんば、人は只だ二足一口あるのみ、遂に其人たるを見ず。人安んぞ二足一口ならんや。

雲の集散し、風の來往し、雷電の隱見する所以、幾何か之を理學の解釋に要むることを得べし。而かも其の究極の意旨、絕待の攝理に至りては、遂に之を幽玄神奧の邊に向つて考及せずんばある可らず。人は曰はん、此れ理學にあらずと。然り單純の理學にはあらず。單純の理學もつて万象の現顯を解了すること能はざるを知らば、則はち亦た此の解釋を以て總ての天變の極旨を速斷せんとすることある可らざる也。

一現象に、理學の理由あり、化學の理由あり、生理の理由あり、心理の理由あり、社會の理由あり、更に超自然、幽冥明の理由あり。而して、一現象の起るや、複雜緻密の因緣果報相關はる。左らば則はち此に理學的の旨義あると共に、道德及び宗敎的の旨義も亦存することを疑ふ可らず。其の現象の所云ゆる理學的の事態なるが故に、其理由も亦單に理學的なりと局定するは、かの大ひなる天地の發動を考思する所

以の道にあらず。況んや、天變地妖、其の影響する所ろは、啻に理學的の事件にのみ止まらざるをや。人命多く亡び、世運太甚しく傷たむ。此の時に當つて單に理學の辨ずる所に委して他の虔潔謹嚴なる感解なからんとするは、野蠻に非ずや。吾人が所謂ゆる文明なるものは之と異なる。嗚呼、文明の人士、何んぞ今に於て粛然として天地の語る所ろに耳を傾むけざる。

海嘯一時に到り、人家忽然として滅す。同胞の死傷するもの六万人、幼老、僅かに生存して氣息喘々焉たり。皇天もと愛なり。其の叱鞭を下す如此き所以の大旨は何處にある乎。回顧せよ、新日本の短生命、何んぞ夫れ禍を受くるとの如此く頻りなるや。疫病あり、洪水あり、噴火あり、地震あり、海嘯あり。天災如此く下る、其の敎ふる所ろ何事ぞ。其の敎ふる所ろを悟るもの多くんば即はち幸なり。其の敎ふる所ろを受けずんば則はち叱敎重ねて下らん、此れ同胞の祝福ならんや。謹んで告ぐ、同胞の兄姉、徐むろに天變の旨義を考想して、其の幽玄の敎訓を悟り、瞥然寅畏して、再たび皇天を煩はすとなからんとを。

東北維新の機

痛歎の辭は、惣べて之れを盡すとも尚ほ嫌らじ。吾人は寧ろ弔慰の心を寄せん。見よ、今は東北大活動の端緒にあらずや北海道よりも更に隔離せる如く思はれたる東北の荒野は、今や全國同胞が心胸の裏に入りぬ。漠々茫々、何處に神經の貫通すらんと疑がはれし東北の大平原は、今や同情血涙の流をもて一貫せられたり。眞とに、東北は今日より大日本のハートとなりぬ。則はち、事業初めて起すべし、機關初めて整備すべし　國粹的調和初めて成就すべし。故に、吾人は今回の大變事を以て東北の維新と見做し、不幸こゝに落命せる同胞を敬して其獻身の犧牲となさん。左らば、生存せる東北の人士、其の負擔せる責任の極めて重大なるとを自覺せざる可らざる也。

災禍の救濟

難に趣むき、義に勇むは、人の赤誠なり。一家、禍あり、此に於て一家和す。一國大災あり則はち亦た一國の結合にあら

ずや。方今、東北の災禍は前代未聞の悲惨を來せり、健在せる他の同胞は、あらゆる力を傾盡して之が救濟に趨らざる可らず。然あらんには、則はち一國の幸機初めて兆し、天惠之より下らん。禍を轉じて福となすの機端は、如今、人の赤誠の消長に依て決す。但彼救濟の方法に至ては、仔細に考究して、愼密に處理せずんばある可らず。殷鑑遠らず、近く愛岐二縣の震災にあり。濫惠、濫與して、轉た人の僥倖心を助長し、勤儉力行の覺悟を無みして、眞誠の事業心を殺ぐことあらば、則はち寧ろ之を救濟の善を行なひたりと云ふ可らざる也。天素と無情にあらず、而も大愛の發動によつて玆に一大異變を下すの時、人間暴りに小慈善に流れて反つて皇天の遺策を補ふかの如くするは、寧ろ潛越に非ずや。其所行の多く効を奏せざる所以のものは、儆戒にあらずや。左れば天災の結果に對しては、同胞あつく同情の赤誠を披くべし、これ第一の命令なり。而も、其の救濟の方法に至ては、被難者の靈精を害せず、更に大いに警戒せしむるの手段に由るべし、これ第二の命令なり。災後の救濟、豈に忽諸に附すべき者ならんや。吾人が、最初に希望する所ろのものは、孤老、孤兒の救育、これ也。他にありては、壯丁に適當の役事を與へんと、勸業銀行的官助の速かに實施せられんと、これ也。

すべて此等の實行には、其の『人』を要す。其の『人』を要することの切なる、如此き場合に於ける如く切なるはあらず。

女學の勃興

果して豫報しつる如く、新女學の勃興は、滿潮の打寄するが如くなれり。新らしき女學校は所々に新設せられ、舊き女學校は惣べて入學生を增し、女學の雜誌は春天の發芽の如く芽出し來れり。而して、上流社會に於ける社交宴會の盛んなる其の本年の如くなるは、過年の大繁昌の時に於ける以來、未曾て有らざりし所ろなりと傳ふ。

一と度び逆境に處し、曾て苦き經驗を嘗めたらんものは、此回、復たび輕率なる落度あるべしとも思はれず。左れど、健忘の弱點を痛慮する人士に在ては、深く警戒を施こすことを忘れ玉ふまじ。歎ずべき事態の既に歴々として眼前に顯はれ來ることなきにもあらざれば也。

隨感

古習舊慣の神聖

其の精神を失なひたる形骸は腐れて臭芬を發す、人これに接して汚らわしとせざることなし。然れど、形骸はじめより其の精神を存せざりしにはあらず、既に形骸と云ふ、豈に其の靈明なるものあらざりしとせんや。われら、古習舊慣を見てただ徒らに其の非を鳴らすは不可なり。既に一と度び世に行はれて人の好しとする所ろに會ひ、而も永續して幾年歳の久しきに生存したらん者は、必らずや之に人の涙をこめ、必らずや時に人の誠に合し、經歷は權威を生じ、古舊は神聖を來し、遂に能く現代にまで行はるゝには至りしなれ。之を奈何んぞ輕淺浮薄の輩らが幼稚の批評に委して、直ちに以て千歲の大歷史を沫却せしむるとをせんや。社會が其の習慣を愛惜して暴りに年少の弄びに任せず、屢々出過ぎたる小改革者を倒す所以のものは即はち此の譯なり。

火葬の情義

「火葬と云ふものこそ慘酷なれ。親しき人の躰軀依然として未だ毫も變ぜざるを火中に投じ、一片の荼毘無情の煙を捲きふすべて而して之を燒かんとす。情けあるものの能く忍ぶ所ろならん哉」と思ひしとも曾てはありしが、左らばとて土葬にしても尙ほ同じき恨みはありけり。死を見ると猶ほ眠を見るが如く、肉衣を脫いで靈躰を取りたる新生涯の行途を念じて彷彿として來往する其の自由なる姿を無乃ろ床しと慕ふとのあらんものに取りては、彼の墳墓こそ靈夢を破つて俗覺を驚かさんとする忌はしき紀念物とはなるなれ。親しき人、土中に埋められて、冷やかなる重き石ころの下に壓せられ、玉の如き膚の漸次に虫蝕まれて、色あしく變りつつありと想像するは、豈に有情の人の能く耐る所ろならんや。此を以て、墳墓は慕はしき所ろにして、亦た忌はしき所ろ、なつかしき紀念のある所にして、亦た想ふだに堪へがたき不吉の標とはなるなれ。一念こゝに及ぶとき、むしろ火葬の我が情に宜しかりしとを惜む。荼毘一片の煙は心細くとも、散じて靈雲に入り升つ

て天界にさまよひ、逝くものの普遍なる靈躰を象どりて、到る處に無明に縹渺せんとの反つて亡き人に相應はしきことを感ず。果して然らば、火葬あに無情ならんや。眞とに是れ恨思盡きざる人の切めてもの慰さめにとて、涙ある人の行ひたる尊とき遺風にてあるらし。淺薄なる文明よ、乞ふ暴りに新論法をもつて之を弄ぶとなかれ。

馬車のよしあし

余は、馬車を惡むとの甚しきものにてありけり。嗚呼、馬車、何んぞ其の貴族的なるや。輕鞭一鞍の簡易を棄てて、重くろしき大きやかなるものを結び付け、無益に可憐の駿馬を苦しめ、韋駄天にも似たらん御者を遊ばせて懶慢として手を空ふして同乘せしむ。而して、主人は倘更ら横着氣に構へて、毫も四肢を勞するとなく、喩へば、吾が住宅の儘を馬に牽かせ乍ら、伴迄で乘せて顧みざるが如し。不勝も亦た太甚しからずや。而も鞭聲一番、曳として老父老母が路ゆく樂しみを破り、彼等を驚かせて其の慍てて逃避するを笑はんとするなど、無情無禮極まれりと云ふべし。嗚呼、余はアンチ馬車黨の熱心なるものにてありし也。左るを今はた之をしも渴望するものとなりけるは、俗か、將た墜落か。惟ふらく、二三の愛兒を同もに乘せて、途すがら草木風景を指ざし示し、會談同和して家庭の團欒を野外に迄で繼續するとを得るは、即はち唯又た馬車あるにあらずや。左れば今只だ吾一人を上なきものと懷くらん愛する幼なきもの等の爲めに、願はくは一輛の馬車を與へよ。土曜日の夕ぐれ、安息日の晝すぎ、一人を缺きたる吾が家庭に野外の會談處を賜はれよなど、昔しは、咀ひ惡みける忌はしきものを今は反つて祈望せんとするこそ笑止なれ。こゝに至つて余は益す、定善の存せざると共に、定惡のまた定まらざる所以を知りぬ。

西幸吉氏の薩摩琵琶

友人大須賀君米國に渡航せんとするに先だつと數日、某氏、一夜、君を饗し、西幸吉氏を招きて薩摩琵琶を演奏せしむ。西氏素と容易すく應ぜざる也。大須賀君の人と爲りと其の洋行の白痴教育の爲めなるとを聞き、感奮して雨中琵琶を提さげて來る。余も亦た招かれて陪す。席上の客僅かに五六、夜

更けて雨板戸を叩き、瀟々として聲あり。西氏則はち第一曲、「國舟」を奏づ。四千万人同乘の船、上み御一人の指揮に隨つて文明の海に航す、風波あり、暴濤あり、能く忍んで則はち彼岸に達せん哉の趣意を歌ふ。其辭莊大、其韻慷慨、蓋し大須賀君の爲に餞するもの也。憶ひ起す八年の昔し、九段坂上に明治女學校第一回の卒業式ありける日、西君に請ふて其琵琶を聞けり。これ蓋し西君が府下の公席に於て多年の秘曲を漏したる最初の時にてありき。此時、君大ひに女生の修學に感激せりとなし、則はち亦た「國舟」を奏せられたり。君が此曲に於るの得意察すべき也。此夜君先づ慨然として此曲を奏し、次曲、忽まち「月花」を演す。「月花」の曲、何等の麗潔、何等の詩趣ぞ。時に武士の風流に泣かしめ、時に情士の哀れに腸を斷たしむ、余は涙の落るを禁ずる能はざりき。君曰く、請ふ好む所を撰べと。余は大須賀君と同に、「城山」を以て要求す。夫れ、「城山」は勝海舟先生、其一生の知己の爲めに哀辭を餞する所、而して、西君は城山末期の悲惨に及ぶ迄、終始西鄉先生に隨從せしなり。此人にして彼曲を奏す、眞に天下の双絶と謂ふべし。君快諾して、更に、「正行」「錦旗」の二曲を演す。蓋し、彌よ其の情感を養なふ也。斯して、夜は彌よ深け、雨はます／＼繁く、風亦吹き出でて屋外更に人なし。一燈を央ばにして、西君、危坐して瞑目す。庶客皆な垂首して默せり。いざや予要めに應ぜんと言ひて、西君やをら巨胸を擴張す。大絃滿引し、一撥手にあり。初彈、戛然として音躍ると同もに、「夫れ、達人は大觀す」の警句、慨然として歌ひ出でられ、「大隅山の狩獵に無念無想を觀ずらん」と吊す。之よりして、一彈、一聲、一氣、一喝、些の間隙なし。聞くものをして、心鼓ち、肉鳴り、音響と同もに躍舞するを禁ぜざらしむ。彌よ佳興に入つて、隆盛、少年が奮戰の狀を見るの段に及び、獅子奮迅の猛勢を象どるに及んでは、急手激甚、彈指電光の如く、絃々皆な飛び、西君亦た躍るが如し。忽然、收めて隆盛、莞爾としてほゝえむの光景を寫す所ろ、目前見るが如し。遂に、城山の最期、達人、空しく倒れ、昨日は陸軍大將と敬まはれ、君寵淺からざりし英雄も、今日は墓なき終を遂げたりと悲しみ、城山嵐のさつと吹下ろす時、官軍、目と目を見合す許りなりと言ふに至つては、人をして痛感絶息せしむ。西君曰く、今夜ばかり意のまゝに演奏せしとは稀なりと。余はひそかに此夜の爲躰を見、一種の神氣、此の妙巧の樂手を動かす天來の

感應を目撃して、愕然警發す。あゝ、此夜の如き琵琶を聞くとは一生のうちに多くあるまじ。西君と雖ども亦た此夜の如きインスピレーションを得玉ふとは多くあるまじ。大須賀君緘默して言はず。余は只だ相見て會心默契する耳。此夜辭し去つて、大須賀君と同もに眠る、而して此夜の感覺未だ曾て消えず。屢記るさんとして屢ば廢す。一夜海外の友を憶ふて忽まち之を記るすと雖ども、此の文豈によく万感の一つをだに寫出し得たるものならんや。

文難

文は思を記さば可なり、而も能く思ひを記して遺憾なきとを得るの文士幾人かある。某と云ふ人、十年、女學雜誌を愛讀せりと謂へり、而して、基督教は單に厭世教なるとを之によりて會得しつつありしと告白せられたりとぞ。又、近頃、無名の一士、書を寄せて、女學雜誌の前生たる女學新誌以來不斷愛讀しつつあるとを告げて而して前號の社說「我國風血統を重んずと言ひがたし」の一篇に對する批評を寄せらる。かの篇拙劣なりと雖ども元と時事に感激したる公事の評論なり、自から別旨義を其文外に存するものなきにあらず。而も此邊の微意は毫も十年の知己にすら察諒せらるるとなし。われ等玆に至つて彌よ不才を覺り、寧ろ筆紙を火かんかと迄でに失望しつれど、再び思ひ返して請ふ試みに更に黽勉せんと自ら勵ましける。

女學

女教師論

長野高等女學校長 同 高等小學校長 渡邊徹

女子の腦力に堪へざる程の高尙なる智識を要せす婦人が身躰に能はさる樣なる筋力も必要ならず小學教師の職業こそ女性か適當の職業なれ故に米國の小學校は十中の八は婦人の手に歸せり我國も亦彼か如くならざる可らずとは米國の流を酌む教育者の動もすれば口にする所たり

女子の見聞は狹隘にして其意志は薄弱に到底剛健にして勤勉なる國民を教養するの任に適せず故に獨逸にては女子のために師範學校を設けず師範學校には女性の入學を許さず我師範學校の女子部廢せざる可らずとは獨逸風を追ふ教育家の主張する所なり米と獨とは共に普通教育の最も盛なる國と稱す我國の教育は法を二國に取れり我の今日ある二國の教育に淑す

るもの多し然るに二國が敎育上に於ける女子の有様は全く反對の位置にあり米に則とりて小學敎師の職務を捧けて之を女子の手に托せんか獨逸に倣ふて女敎師を小學校外に排斥せんか何れを可として何れを不可とすべき

米國は世界中女權の最も盛なる國と稱す斯る國柄なる故に一學校の長として男女の敎師を統督し町村吏員と交渉して內外の勤務にも不都合を見ざるなれ我國の女性として遽に米國婦人の爲す所を爲さしめんとするは無理なる注文と言はざるを得ず獨逸は歐洲中最も女性を賤視する國と稱せらる然も獨逸が女敎師を養成せざるは單に女性を賤むが爲のみならずして學校の組織上女敎師任用すべき道なきが故に非ざるか獨逸學校は概ね單級の組織なりと聞く抑も單級てふ者は六歲より十四歲に至る迄の男女生徒を混合して敎授する者にして已に敎師たる以上は是等の生徒を敎育するのみならず兼て學校の主人公となりて內外の務を負擔せざる可らず是豈女性の適任ならんや獨逸にて女敎師を養成せざるは學校の組織上女敎師を任用すべきの途なきに由るには非ざるか我國の人情風俗は米國と異にして學校組織は獨逸と同じからず獨ならず米ならす別に大日本帝國敎育の方針として中正至當の者莫る可らず

男子を敎育して男子らしき男子を養成し女子を敎育して女子らしき女子を養成せんと欲せば男子を敎ゆるは男敎師に托し女子を敎ゆるには女敎師に托せさる可らず敎育てふものは單に書を讀み字を書き算術を敎ふるに止まるものならしめば止む苟しくも人の品性を陶冶するに在りて敎師が言語動作は生徒の摸範たらしめさる可らずとせば男子が言語動作は女子が摸範となすべきにあらず余は單に理論上斯る論を主張するに非す實際の觀察上實に然かせざる可らざる者のあるを信するに由れり請ふ少しく余をして其說を述ふるを得せしめよ

余が職を長野學校に奉せし當初上田學校を訪問して女子の敎場に至り其が女生敎師を應問するの狀を見て其言語の發達せるに驚き顧て自家の女生を見るに敎師の問に對する每に口言はんと欲して言ふ能はざるもの十の八九に居る就きて之を質し片言隻辭個々に分解して之を言はしむれば皆能く言語に現はすを得て心に解得せざるにはあらさりき退きて其然る所以を追求して以爲く上田學校は疾くよりして女生を敎ふるに女敎師を以てせり我校の女生は多く男敎師の手に托して敎授せしむ女生は男敎師に對して遠慮する所多からん遠慮多きが故に心に解得する所の者も容易に之を口に上す能はざるならん女敎師に對しては遠慮する所少なし故に心に領得せし所は直に之を口に上すを得て知らず識らずの間彼が如き發達を致せしならんと爾後我校に於ても多く女敎師を任用し女生を托するには成るべく女敎師を以てするの方針を執り兩三年を經て復ひ上田女學校を參觀せしに是を以て以前に比して其言語の退却せしにはあらざるかの感ありき是自家生徒が言語の發達して彼と略平準の點に近きしに由りしか爲めなりしなり嘗て某縣の敎師あり我校を訪はれし時問を發して言ふ尊校に於ける女生徒が敎師を應問する所を見るに言語の明諒なる感服の外なし抑如何なる注意ありて彼が如く言語の發達を致さしめ

たるやと余其人に反問して君が學校にては男女級を分ち女生を敎育するに女敎師を以てせしや否やとありしに其人の對に男女級を分ち授くるも未だ女生を敎ふるに女敎師を以てするの運に至らずとの對なりし余曰然らん〳〵女生が言語の發達すると否とは一に女敎師の手に托すると否とにありとて嘗て余が上田學校を參觀せし時其人と同一の感を起したりしことを說き倘當時は女生が男敎師に對するに遠慮の多少に由り彼が如き異同を生じたるものとの考にてありし事を說き倘當時の考の誤りなりしとより更に敎師が言語動作は生徒の摸範ならざる可らず男師が聲音語調は女生の摸範とし得べきに非らず聲音を摸倣せずして單に其意味のみを離して己れが聲音語調となして應對する事は幼稚なる生徒に取りて頗る困難なる事なるが故に其意義を心に解得するも是を口に上すに當りて澁滯するあるは理應さに然るべき事にして之に反し女師に就きて敎を受くる時は敎師の聲音語調を師として之を口に上すが故に心に解得したる事物は之れを言語に現すに困難ならざるが故に識らず知らずの間言語の發達するに至れるなるべし世人動もすれば女子をして久しく學問に從事せしむる時は自ら女性の品性を失なひて言語動作より其思想に至るまで男子の如くなるに至ると稱す是畢竟男師に就きて敎を受くるの久しき知らず識らず男子の感化を受けて然るに外ならず鋭敏なる女子に於て殊に其然るを見るとの言を以てしたるに其人大いに首肯して辭し去られたりき要するに男敎師をして女子を敎育せしむる弊一方は男子の感化を受けて女子たるの品性を失ふに至ると一方は男女品性の相容れざる言語の澁滯となりて其の智識の確實ならざるに終はる事を免れず是等の事は實際に就き觀察する所あらば必ず余が言の空言にあらざるを發明するあらん抑も今の師範學校令は故森大臣の手になりしもの大臣は久しく全權公使として米國に在留せし所の人而して世は米國敎育派全盛の時代にありき故に師範學校令中土地の情況によりては女子部を置かざるを得るの目あるにも係はらず各府縣に於ては概ね女子部を設けられたりき大臣已に逝き獨逸派敎育者の頭を擡ぐる世となりてより女子部を廢するの建議は縣會の議塲に上り是が決議を見るに年一年より多く今は却て女子部を存ずるもの半ばにも及ばざる有樣となれり我敎育進步の迅速なる之を水流の急なるに譬ふべし水流の急なるものは其河道の曲折多きを常となす敎育方針の一定せず屢に米國の波を揚げ夕に獨逸の風を逐ひ西に東に變轉動搖多かりしは止むを得ざるの事情にして尤む可きにあらず特に尤む可らざるのみならず寧ろ其變轉動搖こそ今日の進步を至したる原因なれ然りと雖も學制發布以來已に二十五年復た摸倣のみを事とすべき時代にあらず然るに獨逸の學校に單級組織のもの多しとて頻りに單級組織の訓練上必要なるを說くも男女級を分ち男子を敎育するに男子を以てし女生を敎育するに女敎師を以てするの訓練上更に大に必要なることに心附かず已に設けたりし師範學校の女子部を廢して女敎師を養成するの途を杜絕するを默認するもの丶多きは敎育上の爲め私に痛惜する所なり

以上本篇に論ずる所の要を畧記すれば米國の流を酌むもの動もすれば小學敎師の任は女子に適當なる職業なれば是を女子

の手に歸せよと論じ獨逸の風を慕ふ者は國民敎育の任は女性の任に堪ゆる所にあらざるが故に女敎師を養成するの必用なしと論ずれども我國の風俗は米と異にして其學校は獨の組織と同しからされば米に偏せず獨に僻せず別に中正至當の方針を確定せざる可らず女子を敎育するに女敎師を以てし男性を敎育するに男敎師を以てするか如き實際上理論上我國民風俗上より觀察して中正至當のものなるに世の敎育者中單級學校の訓練上必用を唱道するもの多きも男女級を別ち男子を敎育するに女敎師を以てするの訓練を更に必用なるに心附かずして已設の女子部を廢して女敎師を敎養するの途を杜絕するものゝ多きを加ふるは敎育上痛嘆すべき事なりと言ふにあり論者云く女敎師は勞力淺薄にして人の師となすに足らずと大凡そ淺しと云ひ深しと云ふ比較上より起る名のみ論者は何に對して淺深を論斷せるか尋常師範學校の男生と女生とを比較して之を言ふか男生の卒業するもの直に十三圓を受く女生の卒業するもの七圓に過ぎず七圓の敎師を以て十三圓の男生に比して淺薄なりと云ふか比擬當を失する甚しと謂ふべし七圓の准敎員に比して淺薄なりと云ふが男生徒を敎授せしむる塲合より論ずる時は倘ほ或は可ならん女生の敎授を托する塲合にも倘ほ且つ女師の學力は淺薄なりとして女師を排斥せんとするの意なるか果して然りとすれば是敎育は人の品幅を陶冶する者なることを忘却したる男師の身勝手論のみ余は斯る論者に向ふて辯論を爲すを屑とせざる者なり

或曰女子は人に嫁するものなり人に嫁せば一家の主婦として家政を經理せざるを得ず故に歐米諸國にては法を設けて已婚

量識に今倫日古の如く父子同居は國人の常習にて人に嫁せし
もの必らすしも一家の主婦たらず却りて老父母の
理理…

の婦人の敎師たるを禁するもの多し人に嫁したる婦人の敎師たるを禁ずるものとすれば師範學校にて敎養したる敎師は婚嫁するを束縛せさる可らす之を束縛すれは婚家の時機を失はしむるの恐あり之を束縛せざるか切角敎養したる女敎師は忽ち去りて他の社會の人とならん若し之を束縛して婚嫁の期を失はしむるか米國の如く女子の數男子の數よりも多き國にありては或は然らん我國の如く女子の數の男子の數より少き國にありて女性をして生涯寡居に終らしむる如きは女子其人の不幸は申す迄もなく國家の慶事にあらさるなりと是等の事は一應尤らしく聞ゆれども少しく慮あるものは其言の非理にして實際と相反するの言たるを識認し難からず抑も米國は何か故に女子の數男子の數より多く我國は何か故に女子の數男子の數より少なきか人口の增減は衣食を得る道の難易廣狹に因るものなることとは經濟上爭ふ可らざるの事實なるは識者を待つて而後知らさるなり米國に女子の數多くして我邦に女子の數少なきは豈彼は女子にして生活し得るの職業多く我に少なきを以てにあらずや今や女子の數の少なきを憂へて其の獨立し得る事業を奪はんとす是れ豈に東に往かんとして轅を西に向けんとするか如し事理に通せず實際に疎き論說と言はざるを得ず枉けて論者の說の如しとするも天下の廣き三五万人の寡婦を致したりとて苟も敎育上益あらば何を以て憂とするに足らん而も此言たる人に嫁したる女性を以て敎師に適せず女敎師をして悉く寡居に終はらしむるものとして論せしのみ余は我邦に於て已嫁の婦人の敎師たるに於て毫も不都合なしとするものなり抑も我民風國俗は歐米と同しからず長子相續の

り第二已婚の婦人の…

習慣は今尙ほ古の如く父子同居は國人の常習にて人に嫁せしもの必らすしも一家の主婦たらず却りて老父母ありて家事を經理し併せて子女の敎養を助くるもの多し好し家に兩親なく一家の主婦たらざるを得ざる人と雖も我國は婢女を傭ふ事容易にして身は學校に往來するも子女保育の一半は所謂子守と稱する兒女に托するを得るの便あり現に我校に在りては已婚の婦人にして敎師の職にあるもの八人に及べり然も未だ嘗て不都合あるを見ず且其中の六人は已に子女を有するの婦人に係る只出產の前後を併せて三四十日の欠席あるの小不便あるのみ或曰く表面上こそ指支ひなけれ家事の關係に心を惹かるるが爲め敎授に懇切ならず婦女を擧げたる婦人に於て殊に其然るを見ると是亦男子の身勝手論のみ婦人は其子女に心を惹かるゝが爲めに敎授に懇切ならすと言はゞ男子は妻子に心を惹かるゝか爲めに懇切ならずと謂ふを得べく家事の爲心を牽かるゝ故に敎師たるに適せずと言は世事に心を煩はすか爲に敎師に適せずと謂を得べし要するに敎授に懇切なると否とは其人に存して男女を以て區別を立つべきにあらず假に子女を擧けたる婦人は子女に心を煩はさるゝが爲め敎授に盡すべき力の一部を剝るゝとするも人の妻たり母たる經驗上の智識は其失を償ふて尙餘あるを信ず人に嫁したる婦人の敎師たるに適せずと謂ふは歐米にありては或は然らむ是を我國俗民風の上より論究し是が實際の事實上に觀察するも已婚の婦人の敎師たるに適せずとの理由は我輩未た發見し能はさる所なり

以上論せし所の要は第一女敎師の學力は淺薄なりとの說の如き比較當を失したる男子の身勝手論たるに過きずと云ふにあり第二已婚の婦人の敎師たるに適せずとは歐米にありては或は然らむ我長子相續父子同居の俗にありては理論上より見るも實際上に質すも嘗て不都合の點を發見する能はずと云ふにあり然も此論たる女敎師を任用する上より生する直接の利害を辯したるに過きず其間接に受くる所の影響の如き是又深く考究を要するの價値あるを信ず請ふ是より更に立ち入りて間接に受くる所の得失を論せん

明治十五六年の頃にやありけん余が大町に奉職中縣下の諸學校を參觀せんとて先づ長野學校を訪ひ尋ひで上田學校に過き諏訪に出て其上下の學校を觀松本を經て歸校せしことありき當時長野に中學校設置ありて中等卒業以上の生徒は盡く驅りて中學に入れしか故に中等一級より上の生徒はあらざりき故に余は中等一級の生徒に就き各校を比較して參案となさんとしたりき長野の一級生徒三十餘名ありて其中女子二人あるを見しのみ上田に至りて之を見しに中等卒業の試驗を受けんとの用意にて物理科の温習をなし居る時なりしか其生徒は總して三十一名なりしに內に十二名の女子あるを見たり去つて諏訪に至りしに上の學校には一人の女生なく下には二人ありしと覺えたり松本に來りて聞けば中等一級の女生は四人ありとのことなりしが會々日曜日の休暇に當り參觀するを得すして歸りたりき余は當時他の學校は女生の數極めて少なきも上田のみ中等一級を卒るもの三分ノ一以上にあり何が故に彼が如くに多きやとの疑問を起したり他校に嘗て見さる二人の女敎師あるを見たりしも當時は單に女生の多き結果にて女敎師たる人を出すことゝなりしならんと見し迄にて是ぞと思ふ考

も起らざりき明治十九年余が長野學校に奉職せし當初中等一級にある女生八人ありしが中等科を卒業すると共に退校して高等科に足を蹈みかけしもの二人のみ其の二人も一兩月を經ざるに盡く退校したりき余是に於て大に感悟する所あり女生の高等科を修むるもの丶少なきは習慣とは云ひ伴侶少なきに由るならん上田に女生の多かりしは上に女敎師ありしもの與つて力ありしならん縱令生徒の伴侶は少しとするも敎師にして女性ならば或は女生をして是を高等科に止めしむるを得んとの考案にて東京師範學校より女敎師を聘して女子部の長となし高等に入りし女子の敎育を托したるに果して其期より高等科に足を留めしもの十餘人を得たり最も當時は學齡實施の際にて學年も變じ爲めに二學級を合併せし等の事はありしも其生徒中高等科を卒業するもの十二人を得たりき是本校に於ける女子の高等科卒業生を出したる初にして余は當時余が考案の違はさりしを悅ふと共に自ら其意外の好結果なるに驚きたりき是等の實例は余言を待たず女敎師を任用せし學校に就きて之を質は比々然りとの證を擧くるを得ん縣下の敎育は他縣に比して盛大なりとは我の信ずる所人の言ふ所然も女子修學生と女子にして高等小學を卒業するものは遠く群馬栃木の兩縣下に及はず女子敎育は敎育の淵源にして我國の文化を知らんと欲せば先づ女子敎育の如何を見よとの言をして果して信なりとせは我の敎育は栃木群馬の敎育に對して耻るなき能はず彼の敎育は其力の淵源乃ち根抵を養ふに專らにして我は乃ち其枝葉の繁茂せしに類するものあればなり根抵深ければ自か枝葉繁茂の期あり根抵なきもの其枝葉凋衰し易ければなり然も女子は敎育するに必要なく今日の儘にして可なりと言は丶乃ち止まん若し女子の敎育をして一層普及せしめざる可らず其の程度をして一層高度に進めざる可らずとせば女師を敎養するに尙一層の力を要して而も各學校に於ても或は聯級に編制しても女生を敎ゆるには女敎師を以てするの方針を執らんことは余が敎育者監督者とに向ふて勸告せんと欲する所なり

時事翁近時の女學論

明治十八九年の交、女學の氣運一時天下を席卷せしや、輦下の新聞紙相爭つて、女學論を唱ふ。中にも之に最も熱心なるが如きを示したりしは、誰しも記せん、其時事新報にてありしとを。其「日本婦人論」は紙面十數日に亙りたるの長論文にてありき。男尊女卑破らざるべからざるの論あり、男女交際論あり婦人の財產、職業、旅行等に就て度々の議論も見えたり。其間には娼妓の徳、日蓮親鸞に如べしとの奇説を載たる「品行論」の大論文は現れたりき。思へば如斯かりしは既に十年の昔と過にしを、今や再び今日の女學氣運再興の秋の既に半なるにも及ばんとするに到りてや、吾人は再び彼時事新報が、此の上

屢々女學論を繰返すを見るなり。於是乎一には回顧の情の催促せらるゝものあり、一にはまたいたく彼が今時女學界に盡くすの誠心を感謝するなり。

福翁百話が其數篇の家庭訓をものするや。其絢爛圓熟なる筆と、其玲瓏溢美なる詩趣とは、妙味吾人をして沈醉せしむるものありき。其家族團欒を説くが如き、ア、これ福翁が多幸多福なる家庭の生活を樂しみつゝ、詩神に誘はれ、其靈筆を以て歌ひ出したる、一篇妙韻高致幽玄極まりなきの散文詩とこそいひつべけれ。先生歌ふて曰く、

夫婦和合して一身同體遇ふて言はざるなく、言ふて聞かざるはなし、嘗に言ふて聞くのみならず、四目相見て兩心悟了し、以て用を辨ずべし、之を不言の言と云ふ時に或は双方の意見を異にすることあるも、恰も自ら訴へて自ら裁判し、曾て他人の聽を煩はさずして、忽ち歸する所に歸すべし、營々勉強内外の事を分擔し、辛苦を共にし、樂事を同うし、父母に事へ子女を養ひ、家道の貧富盛衰は均しく家人の身上に感じて、毫末も厚薄の外なき其有樣は、正さしく天然の寒暑晴雨を共にするが如くなれば、苦樂は家の苦樂にして、人の苦樂に非ず。既に家人同感の苦樂にして、其間に一點の挾むものなしとすれば假令ひ不幸にして貧苦なるも、苦中却てますく團欒の情を厚うして、自ら肉體以外の安心を存すべし、況んや資産の豐なるに於てをや。洋々たる快樂は家人の均霑する所にして、與ふるも意に留めず、與へらるゝも謝させず、他の美か見れば、我美なるが如く、我不愉快は他も亦之を共にし、同一様の遊戯を幾度ひ繰返しても倦むことなく、古き物語も再三聞て新しきが如く、子女談笑の聲は自から一種の音樂にして、其間の大間違は唯一笑に附するのみ。爐邊の澁茶は甘露の如く、手製の團子は無上の美味を呈し、滿門の一事一動一事一物都て、快樂の資たらざるものはなし、左れば貧富共に家族團欒の至樂は他人の得て知らざる所に存して、唯自から享るのみ、人に語るべからざるものなり。

自ら其樂しみを樂しむの人に非らざるよりは、誰か如斯くに其歌を歌はんや。先生また曰く

夫婦家に居て相互に親愛すべきは當然にして、特に傍より勸告するにも及ばざる所なれども、其親愛の外に敬意なからざるべからず。凡そ人を敬するの法、之に告ぐべき事を隱すより不敬なるはなし

と。その識見凡眼を拔き、而もこれ先生實踐する處の意見たらずんばあらず。これ必ずや先生をして彼家庭歡樂の高吟を朗誦せしむるの因をなすものなり。福翁の家庭訓は福翁の自ら行ひ、自ら信ずるの訓戒なり、故に一々千鈞の重きをなす。此故にまた吾人は其の女學論に大なる敬意と信用とを加へ、吾人は常に之に傾聽す。其近時論ずるが如き、數篇の女學論、殊に女子教育に關する議論の如き、吾人は悉く其意見に同ずると能はざるも、此等は實に今日聽くべく重んずべきの女學論なり。乞ふ左に其要項を擧げん乎、

時事新報が六月二日の紙上に於て「教育普及の實」を論じ、其翌三日また「女子教育」を論じたる、これ果して福澤先生自身の筆に成れるや否やは定かならねども、議論の躰裁、至

くこれ先生の志をいふものに非ざるか。其「教育普及の實」を論して

世間或は教育普及を賀するの言あり、人民全體の上より見れば、我國の教育は訓令に普及の實あるが如くなれども、其中に就て男女を區別するときは、小學にてさへ、女子の就學は、男子に比して甚た少なきのみならず、男子の教育には中學校高等學校大學を始めとして、其他各種の學校に乏しからざれども、女子の爲めに小學以上の設は殆ど絶無なりといふ。凡そ一國の社會は一家より成り、一家の本は夫婦の社會に始まるものとして、其一方より觀察するときは教育の得は未だ社會の中數に及ばざるなり。

と說き、高等教育は女子をして生意氣ならしむるといふは、女子教育の普通ならざるによると、論じ、また女子躰育の要を論じ、且つ女子教育反對說の女子の口より出づるものならんには尙ほ恕すべきも、多くは男子の唱ふる所なりとは驚き入たる次第なり、これ畢竟男子の女子を玩弄物視するに由來すと難じて、

眞實國民の母たるべき女子を造るを目的と定めて、其事に注意し、國中の人口を計へて、男女の別なく、教育普及の實を擧げんと我輩の希望する所なり。

と結論せり。其又「女子教育」を論ずるに曰く、

女學生中には隨分變物ありて、一見嘔吐を催すべきものあれども、又一方より見るときは、斯る變物を生ずるは自然の結果にして、止むを得ざるのみならず實際には其變物も亦自から幾分の効能なきに非されば、之が爲に一般の教育を厭ふが如きは斷じて不可なりと云はざる得ず。

彼變性女子の流は到底人の妻とも爲れず、母とも爲れざる社會の厄介者にして誇り教育の爲に殺されたるものに外ならず。當人の爲め、又其父兄の爲めには誠に氣の毒の次第なれども、他の女子たるものが此體たらくを見て自ら警しめまた一般の父母も之を好き戒めの手本として子女の爲めに注意するときは、彼の變物の寶は、恰も身を殺し仁を成すの姿にして、其効能自から少らざるべし。

隨分手いたき所まで論じ詰めたり。時事翁其人にして始めてこの痛論もあり得べし。吾人は教育がいはゆる變性女子を生じ得べしとは信ぜずと雖も、いふが如きは、女子教育の振興は幾多の弊害を伴起し得べきも、その弊害は決して恐るゝに足らず却て之を利用して、ますく斯道を興すべきなりと用心深き說をなすものなり。結論に曰く

されば文明流の餘波として幾多の變性女子を生じ、之が爲めに幾十人幾万人の女子を殺すも、是等は姑く世の中の廢物として捨置き毫も驚くに足らざるのみか、一般の爲めには効能あるものにして、斯く些末事には頓着せず、ますく進んで文明の教育を奬勵すべきなり。

この志を以て天下の人女子教育を行ふの志をなさば、斯道常に盛なると、其久きを致さんに、我國人兎角に小膽にして、少の弊害の生ずるを見れば、忽ち驚愕畏縮し、終には角を矯めんとして、牛をも殺すに至るの例、之を過去の女學盛衰史の殷鑑に照して明かなり。

次ぎに例の福翁百話中に見ゆる、福澤先生が正銘打つたる女學論なり。「女子教育と女權」とに曰く。

世間の教育家と稱する者は、我國に於ける男女の關係を見て、男尊女卑の弊習を憂ふること甚だしく、女子教育の要も自から其の邊に意を寓するもの丶如し、如何にも尤も至極なることにして、女權不振の事に就ては是非とも舊弊を一掃して正當の道に歸せしめざるべからず。唯其方法に至りては、妙案なきに苦しむのみなれども、我輩の所見を以てすれば、男女の間に行はれ無根の弊事を計へ立て丶喋々するよりも、何は扨て置き彼の公然たる多妻法を禁ずるのみにして、却て大に實効を奏することある可しと信ずるものなり。

社會の風潮漸く趣を改めて、人々皆多妻妾法の忌むべきを悟り、之を男子の醜行として蓄妾買淫の道を杜絕（假令ひ表面にても）するのみか、既婚の妻を襲ふて再婚を計るにさへも世間を憚りて、多少の困難を感ずるが如き習慣をなすに至れば、婦人の權力大ならざらんと欲するも得べからず。

女子の教育は尋常男子に等しく决して怠るべからずと雖も、其教育一偏を以て女權を云々せんとするが如きは、到底無益の沙汰なり。苟も世に多妻の醜風を禁ずるか、假令ひ之を禁ずるに至らざるも、之を醜視するの風を成して、男子專橫の道を塞ぐにあらざれば、婦人社會は依然として、舊時の如くならんと。

花柳の賣女遂に親鸞日蓮と其德を等しくせざるなり、先生既に如斯に女權振興の道を談ず。更に一歩を進めて先生自ら女權の友として、天下男子の痴迷を醒さんは如何に。

先生先づ女權の興るべき第一の道を講じて、翻て我邦必ずしも人の窺ひは女權の大なるものなきに非らざるを論ずるは其「男尊女卑の弊は專ら外形に在るもの多し」の題目下に於てす

例へば商賣人の取引に就き其身元を探索するとき內君の性質如何は尤も大切なる個條にして、內君果して確實なりといへば、竊に之に依賴して、資金も融通し、品物も貸すの例は商人社會に珍らしからず、實權の存する處窺ひ見る可し。

先生我國女權の如何に大なるかを例して、

といひ、更に日本女子の權力は外形の卑屈なるが如きに似ず內實西洋婦人にも優るの權力を有するとなれば、女權論者たるもの、互に其實權の輕重を爭ふよりも、先づ其外形に於て改良を謀り、

日本婦人固有の優美は、其まゝ大切に保存しながら、男子の方より之に接するの風を和らげ、男尊の尊を引き下げて自然に同等の形を裝ふべし。

とて、妻を呼ぶにもさん付にし、之に手紙を贈るにも文言を橫風に認めず、名當はどのと書かずして樣の字を用うるなどよし。かくすれば、毫も主人の重みを減するものに非ずして却て家庭子弟の間に優美高尚の風を養ふべしとは先生の意見なり。之を聽いて吾人は、轉た先生家庭の厚風の程思ひやらるゝなり。妻に威張るやうなものは、必ずや世の中でよう威張らぬものなり。外で人に壓制せらるよりして、之に見傚つて仇打ちの積りにて、我家の可憐なる妻子を壓制す。さるいくぢなしの妻たる身もまた哀れむべきかな。福澤先生の日本女權を觀察するの如何は、以上既に之を知るに足りて、なほ左の斷案は更に、其意見の存ずる處を確かむるに足れり、曰く

我女權の不振は、專ら其形に在るが故に、改良の道斷じて至難に非らざるなり。

敢て至難の業に非ずとはいひ難きも、女子教育の普及と、女子運動區域の擴大とは、自ら女權の伸張を來さゞるべからず社會進歩活動して、男子の運動いよ〳〵大なる時、即ち女子運動の區域は擴大す。されば推して之を論ずれば女權の伸張し得ざる時代は、男子が社會上に縮退壘守するの時代なりと稱すべきなり。故に今後の社會はよく進歩すべきものなれば女權の伸張やまた疑ひを容れざるなり。此時に當りて、女權の振興を以て任ずるの徒は宜しく其機に後るゝことなくして彼伸張すべき女權に供するに、莫大の實力を以てすへきにあり女子教育振作の要於是乎緊切なりといふべし。時事新報及び福澤先生の女學を論ずる、素より奇説妙論あるに非ず。福澤先生は常識の人なり、故に其説平凡なる常識を談ずるに過ぎす。然れども女權伸張、女子教育振作の如きはもとより常識をいへば、誰か之に反論を示すべけんや。常識を逸れたる學者先生、理屈家こそ、兎や角の奇説巧論を弄して、斯道の進歩に障害ともなるなれ。難波の蘆も遠き眺めには佳景なれど小舟棹さし行くには障り勝ちなり。吾人は女子教育の必要が論らはれ、幾多の女子教育説が、人心を搖動する時代の過ぎて、父兄はたゞに習慣より、常識より、何とはなしに女子を教育するに至らん時代の來らんことこそ望ましき限りなれ。今日の女子教育を振作せんと、理屈を以てするも其効薄し、要は常識を以て常識を警醒し、事實を以て、事實を求めしむるに在り。故に吾人は時事翁が其大なる常識を以て天下の常識に告ぐるの平凡なる女學論を多とするなり。

女子の職業

報知新聞の續々報道する處によりて、吾人の知り得たる「女子の職業」の現況調査は歩を進めて、電話交換手、印刷局の女工、莨煙草の内職等の目に入れり。以下例によりて其要項を摘抜す。

○電話交換手

○其資格　年齢十三歳以上二十三歳以下の身體壯健品行方正の女子採用。志願者は體格試驗後讀書（電信電話に關する規則類）作文（書簡文）筆跡（楷書行書）算術（加減乘除）等に及第すれば三ヶ月間見習生を命じたる上、適當と認めたる節電話交換手たるを命す。

○給料　交換手の見習中は手當として一日金五錢以上十錢以下を給與せられ、愈々本職に直りたる後日給十二錢以上廿五錢以下を給與せらる。尤も一定の期限を經過し、或は特別に勉強する時には給料を增加し、或は手當金を與へらる。

增給は一回三錢を限り手當金は一ヶ月三圓の定めなり。又其給料額によりて增額年限の差違あり。即ち日給十八錢以下の給料を獲るものは、一年を經過せば十九錢乃至二十一錢となり、十九錢以上のものは、一年中を經過せば、二十錢乃至二十二錢となるなり。尙ほ滿三年を經過し、勤勞拔群のものは、格別にて漸次日給金四十錢まで增給せらる。現時正最高額を支給され居るものは東京電話交換局に三名ありといふ。

○印刷局の女工

明治八年故印刷局長得能亘介氏は印刷局に女工を使用するとを始めたりしが、當時女工を官業に使用するは破天荒の事とて、大藏省邊にては隨分之を非難する者ありしかども、得能氏は毅然として、所說を變ぜず、續々女工を使用し、遂に今日の亘成績を見るに至りたり。得能氏が當時女工使用の利益を說きたる要點は實に左の如かりしとぞ。

第一　女子は其躰力男子に及ばざれども其資性緻密にして、懶惰の弊なき事
第二　女子は感覺鋭敏にして堪能の見込ある事
第三　女子の仕事は謹嚴に行はれ易き事
第四　女子の賃銀は低廉にして怠惰の狀なき事

印刷局には現在使用する女工數は

印刷部	女工取締十二名	女工三百六十三名
抄紙部	女工取締十一名	女工二百四十八名
活版部	女工取締五名	女工九十三名

あり。女工の就業時間は一日十一時間朝七時より夕五時に至る。尤も一、二、十一、十二、の四ヶ月間は十時間の定めなり。休業日は日曜日、大祭日、祝日等なり。女工等級は滿十二才以上なれば幼年試驗工として採用せられ、十五才以上なれば、普通試驗工として採用せらるべし。此等の女工は三四ヶ月を經たる後、幼年試驗工なれば二級に昇し、試驗女工なれば、等外四等女工となす。夫れより以上は大抵一年越に昇進する定めなれども、拔群の伎能ある者、又は非常の功勞あるものは、數等を進められ或は伍長、取締等に拔擢せらる。また往年は賞與の制度として皆勤賞與、精勤賞與、發明賞與、善行賞與等の定めありしも、今日は會計法の爲に制せられて、孝女貞婦等の美事あるも、昇級の參考となるのみに過ぎず。去かし年末の賞與丈けは變らず行はれ居るなり。女工の賃金は、

幼年試驗女工	七錢	試驗女工	十錢
試驗女工二級	十錢	同　一級	十二錢
等外四等女工	十三錢	等外三等女工	十六錢
等外二等女工	二十錢	等外一等女工	二十五錢
三等女工	三十錢	二等女工	三十五錢
一等女工	四十錢		

尙ほ此外に伍長取締ありて、伍長は三等以上の女工中より拔擢し、普通日給の分別に給與せず。取締は一等女工若くは之に匹敵する女工中より撰拔して、之に任じ、印刷局の雇員として待遇せられ、十圓以上二十圓以下の月給を給與せらる。現今取締中にて最高額の月給を獲るものは、一ヶ月十八圓に

て印刷部に一人あり。其他十五圓十二圓、十圓等なり。

印刷局の女工は故得能局長の遺法によりて、取締法嚴重に行き届き、保護法十分に備はれりといふ。印刷局には元來職工積立金の法ありて、役員職工共毎月給料の幾分を割きて積立しむる制規なるか、女工は貯蓄の念に厚きより、王子抄紙部のみにても女工の積立金一万圓以上もあり、久しく勤めたる女工は一人にて四五百圓を貯蓄し居れるものありといふ。抄紙部の女工は近在の農家等より稼ぎに來るもの多く、其得たる賃錢を以て後日の嫁入仕度をなすもの多し。また農家生育の女子の事とて、田地購入の風行はれ、最初は微々たる小百姓も、此貯蓄金を以て田地を購ひ、今は公民の資格を得、有福に暮し居るもの尠からずといふ。

○卷煙草の內職

現今東京市中にて卷煙草を製造する處は、岩谷商會を始め、二十餘軒あり。卷煙草の賃錢は、其煙草の種類により、又其寸法の大小によりて、一定せざれども、平均一錢二三厘位なりとす。左は岩谷商會の規定、賃金は總て百本に就てのものと知るべし。

一天狗	八分口付	八厘	赤天狗	八分口付	一錢
木葉天狗	六分口付	一錢	青天狗	八分口付	一錢一厘
中天狗	九分口付	一錢二厘	金天狗	九分口付	一錢三厘
大天狗	一寸口付	一錢四厘	御賜	一寸口付	一錢五厘
靈天狗	九分長口付	一錢八厘			

又葉卷煙草精撰一貫目の賃錢として同商會の規定によれば

	一等	二等	三等
一號	十八錢	同	同
二號	同	同	同
三號	十四錢	十三錢	十二錢
四號	十三錢	十二錢	十一錢
五號	十二錢	十錢	九錢

右は卷煙草の原料となるべき葉拵の賃金なるが、尙ほ刻煙草となるべきもの、葉拵へ賃金は左の如しといふ。

	一等	二等	三等
小高	二十四錢	二十二錢	二十錢
靈高	二十六錢	二十四錢	二十二錢
大高	三十錢	二十八錢	二十六錢
金高	三十四錢	三十二錢	三十錢

以上中には砂掃の賃錢をも含むものにして、其賃錢は一貫目三錢より六錢迄なりといふ。岩谷商會にて、現今通勤の工女百餘名ありとぞ。卷煙草は細君達の內職ともなり、家內にても從事し得るが故に、方今この內職に從事するもの山の手邊に多しといふ。

婦人雜誌流行の時代將に來らんとする歟

女學界の機運一たび挽回するに當りて、「女學講義錄」「日本の家庭」等先驅をなして、婦人及び家庭を相手の雜誌次いで至らんとするの狀あり。吾人は今月に入り、東京にて博文館文藝倶樂部に少からぬ關係ありと覺えらるゝ人々の手に成れる「女學草子なでし子」第一號の發刊に接し、地方には大分與仁婦人協會の機關「明治文琳」の發兌せらるゝを見る。此等豈に婦人雜誌界繁盛の時代を豫告しつつあるものに非らざるなからんや。思ふに我雜誌界は遠からずして各種の名稱を帶ぶる幾多の婦人雜誌を以て賑はさるゝに至らん。吾黨と志を同じうするもの續々として多からんと吾人之を喜ぶ。而して今に於て往年吾人と道を同じうして女學界に奉じたる幾種の雜誌の、今は既に其跡だに此世になきものを追想し、思ひ出づる儘に其名を列記して、其昔を忍ばんとす。

女學叢誌、いらつめ、貴女の友、君子と淑女、文明の母、新婦人、女新聞、日本の女學、婦人教會雜誌

なほ此他に失念中のものもあるべけれども以上は往年東京市中にて發兌せられつつありし、婦人雜誌中の重なるものなるべし。其他地方にても實に數多の婦人雜誌發刊せられて、一時其勢の太甚だ盛んなるを見たりしが、其時代は既に七八星霜の昔に過ぎ去りて、今や再び其時代の反り到るに迫らんとす。序に現今東京及び地方に於ける婦人雜誌の大概を列擧せん。

婦人衞生雜誌、家庭雜誌、日本の家庭、婦人新報、日本婦人教育會雜誌、婦人弘道叢誌、女鑑、花の園生、御國の母、婦人雜誌、法の母、女學講義錄、明治文琳、なでしこ。女學雜誌

今後は此等に幾許の列名を加へて、また幾多の變遷を見るとならん乎。

松方伯の女學教育談

松方伯頃日鄕里鹿兒島師範學校に於て、一場の演說を試む、中、女子教育に關するの一節左の如くに抄錄せらる。

女子の御方は、殊に行儀行跡を愼み、女らしいと言はれる樣にありたい。他日學校教員となりて、子弟を教育するにしても、又良妻賢母となりて、一家を修むるにしても。女らしいと云ふ德を備へればならぬ。家庭と云ふ者は、大事なるものぞ。其結果は、万事に及ぶからして、兒女の教育は、家庭の訓が、大に素をなすものぢや。如何に學校教育に力を盡しても、家庭教育が惡しければ、一日之を緩めて十日之を冷すと云ふことになり、誠に教育の甲斐がない。女子部の御方は、一度は人の師となり、遂に良妻賢母となるべき人であるから、今日より婦德を養ふて、立派の家庭を作るやうになされたい。今から申しておくも、早計に似て早計ではあるまい。

松本君平氏の日本婦人說

松本君平氏『英文國民の友』第五册誌上に「社會上に於ける日本婦人の地位」を論ず。論旨外人の日本婦人を誤想するを辯ぜんとするに在りと、要するに其說日本婦人は其の地位亞細亞の姉妹と、歐羅巴の姉妹との中間に在り。古代の日本婦人は、現在に於けるよりも、遙に進歩せし者にして、日本の誇りなりき。然るに現今の日本婦人の地位は往古よりも沈降し、本位の地位より退けられたり、今に於て之を救はんとせば、彼等の間に教育を盛んにし、以て宗教思想によりて養成せられたる東洋思想を排除すべきなり。今日は正に其時に際せり、最大の勇氣と最剛の決心とを以て、凡て來らんとする反動に堪へ、其目的に突進すべしといふに在り。

觀潮

（二十二）　大異變と國民の道德

全人類を總括して、爰に人類の大精神に結合し、各人そが部分として行爲するは最上なり。國家を組織し、國家の精神に

結合し、國民として國家の爲めに行爲するを其次とす。一種族、一社會に於て此事あるは又其の次なり、一家族、一私人と降りて益〻下卑となる。一己人には一己人の精神ある如く、民族に民族の精神あり、又國家に國家の精神ありとすれば、漸次小環内より進化するに從て、最高尙となるものなり。近世の文明に缺點不尠と雖も、而かも個人としては何事をも成就する能はず、國家として、又人類として有機組織を爲して、始めて個々の圓滿なる發達を爲すに至らしめんとする傾向は實に喜ぶべき事なり。宗敎も此意義に於てせば頗る尊く、敎育も著大の價値あるを認むべし。

人生歷史は戰爭の記錄に過ぎずとも云ふ。戰爭に加ふるに、人事界には天變地異の災厄ありて、古來幾億の生靈を慘殺したり。而かも最近の文明諸國には、社會的自識、國民的我の觀念發達し來りし爲め、國民の道德亦非常の發達を爲せり。我邦に於て電信、鐵道、新聞紙等、多少發達して以來、先づ國民の視聽を惹きしものは、鹿兒島戰爭、ノルマントン號沈沒事件、磐梯山の破裂、尾濃の地震、大和十津川の水害、酒田其他の大地震、日清戰爭、及び今回の東奧の海嘯等なり。是等は其性質に應じて多少感情を異にせしむるものなりと雖も、殆んど國民全躰の精神に刺激を與へたるものとす。

社會進步せず、交通不便なるときは、東に起りしもの、西之を知らず、西に起りしもの南之を知らず、東方は東方に起れる事變に同情するも、他は痛痒を感覺せざるものなりき、則ち此時代や「我等」「吾人」なる社會的自識は頗る狹小なる環内に限られしなり、從て不幸の民は小環内の同情を得るの外なかりしかども、今や大に然らず、是れ單に人間思想の交通を爲す機關具はり、國家は一の有機躰となりて、全國民の間に痛痒を感ずるが爲めなり、近代文明の賜の致す所とす、斯の如く國民が共同して、同情し愛憐する傾向は、益〻進步するものにして、漸次に全人類に及び、數千里を離隔する他國民と雖も不幸あらば、均しく共存する一國家として愛憐するの情發達す、爰に於て乎、人類の幸福極まれりと云べし。近世の學說、人情、皆な此傾向を補助し來れり、國家の活動斯の如くに進步して、國民の道德最高度に發達し、從て之を組織する個人も亦滿足するに至るなり。

前述せる大事變に於て、當時〱の感情を比較するに、大小

長短に於て異なるも、彼の鹿兒島戰爭の如き、內亂の一種なれば國民の或一部は、國家組織を害したるものと云ふべく、又地理的關係に於て大に隔離せる所、例へば東北地方の如き痛痒を感ずること少なかりき（餘響は暫らく措き）、ノルマントン號沈沒の際は、新聞紙も多數にて、我同胞の死亡と稱して義捐せるもの多かりき。磐梯山破裂亦大に人心を振動せしめき。尾濃の大地震に至りては、前者に超えたり。酒田に於ける地震は尾濃よりも慘狀を呈したりしも、日淸戰爭の端緒を開きたる頃ほひなるが爲め、前者とは感覺の度を異にしたり、最も長大且つ激烈に國民を振動したるものは、無論、日淸の戰爭事件なり。而して今や東奧の大海嘯あり。之に關しては上　陛下の御憐恤を始め奉り、下幾多の庶民に至るまで、義捐し、慈善しつゝあり。斯の如き行爲の發達は、近時に於て特に我國民間に進步したり。之に依て國民道德の進步を計るに足るべし。是れ實に國家を組織し、言語一、風俗習慣相類似し、法律一、制度文物均齊に出づるの結果なり。大事變なるものは屢々生起するものに非ずと雖も、漸次人心を激動すること薄弱となるが如し。國家を個人と比較すれば、少年の時代は、國家の未だ組織密ならざる時と均く、壯年の時は國家の隆盛なる時の如く、老年の時代は國家の稍衰弱せるに均しからん。少年年代は「吾等」の觀念狹小の部分に擴まるに過ぎず。壯年の時代は最强、最大の活動を爲し、「吾等」の觀念が全人類にも及ぶものなり、壯年の時代や刺激せらるることあらば活動强し、故に花やかなり。漸次慣るゝに從て、刺激するものあれば或者は鈍くして無感覺となる。是れ眞の衰弱なり。或者は靜肅にして無意識的なり。前者は老いて戒むる慾にあり的の進化なり、後者は爲すべきの義務あることを充分に經驗し、驚愕、悲哀を外形に表はすことを爲さず、而かも左の手の與ふ所、右の手之を知らさる如き無意識的慈善を爲すに至る。此無意識的に道德の圓滿なる活動を爲す所、之を天國とも涅槃とも大極とも名くべし。而して全人類が此理想に達する順序として、國民道德の進步を期せざるべからず。

教育

戰後教育の弊處（一）

偏狹なる國家教育の弊

慷慨悲壯を以て精神とするの教育が、戰後の教育界に幾許かの弊害を醸さんとするの憂は、既に之を論じたり。而して之と聯關して、其弊害を今日の教育界に蒔き散さんと、彼よりも更に甚しきものを偏狹なる國家教育の弊なりとす。其弊害の如何に顯はれんとするか。また世の教育家を以て任ずるものにして、如何にさる偏狹なる國家教育説を主張しつゝあるか。今また爰に之を觀察せん。

往古の以太利人民は、神の撰民と自稱し、支那は自ら誇りて中華と稱へ、我日本は自ら東洋の君子國たるを任じ、彼等各各外邦を呼んで異邦と稱し、夷狄と賤め、禽獸視するは、皆これ自國に盲信するの淺薄なる國家思想に基因するものにして、恰も新田の太郎作が、猫の額程なる裏の野らを見渡して、其廣大を誇ると同一般なり。尤もさる井蛙の見にも中自ら美なるもの在りて存すと雖も、たゞ自ら大なりとして、之に安んぜんとは、從つて思想の縮少を來たして、この思想もし國民一般に及ぼさんには、國家は退守縮小するの外なく、進取を國是とするの國家にとりては不祥是より大なるはなけん。然るにこの縮小的なる國家主義の教育界に於けるや其流毒既に尠からざるに、戰後の今日は更にまた其勢を新にして以て犯し來らんとす。豈に憂へざるべけんや。

今史を按じて、上代日本國民の國家思想を察するに、其濶達宏大なる實に驚くべきものあり、遙に照して、二千年後の子孫が、文運進歩したる社會に處して、抱持する國家思想の如何に偏狹縮小なるかを嗤笑せんとするが如し。上代の民は、自由に三韓肅愼の蕃族の歸化を許して、而も之を利用して、職を授け、官を與へ、地に居らしめ、以て彼等と共に、國家の形成に勉めたり。萬里の波濤を御し、全世界を家となし、故に自から尊大にせずして、盛んに他邦の文明を吸收し、甘んじて其の教へを受けたる、我國民の祖先の氣象の雄大なりしこと、其の思想は即はち豪壯雄大なる世界主義にてあ

りしなり。今日の國家論者、果して祖先の雄志に恥づる所なきか。志かく雄大豪壯なりし日本國民の國家思想は、德川三百年の鎖國政略の爲めに削殺せられ、縮小退步して、國民に與ふるに偏狹なる國家思想を以てしたり。偏狹なる國家思想の國民には進步なし。故に三百年の鎖國的國家は進取開國的國家が十年の進步をだになす能はざるに非ずや。一旦鎖國の迷夢醒破し、開國進取の國是に歸するに至り、今や我國民は洵に上代祖先の國家思想を必要として、而して因習の既に久しきを致したるや、剳に彼僻心狹量を脫離する能はず。一時盲進的活動をなしたりしにも拘らず、忽ち小弊害の蹉跌に懲りて舊蝸廬に退縮し、所謂保守的反動なるものを來たして、國粹保守の說喜ばれ、這般はまた他極の弊竇に陷り甚だしく鎖國時代の遺習たる偏狹なる國家思想を呼び起して之に誤まられたり。盲進の活動は素より賀すべきの事に非す、然れども之をかの畏縮退守するものに比すれば、國是の爲に遙に利する處あり。たゞ其弊害をいへば、彼にもあり、之にもあり、其孰れをいふ能はざる也。假令ひ盲進と雖も、彼は國家の進取を意味す、過ちありと雖も其志や守らざるべからず、之を守りて過つ、其過ちや寧に恕すべきのみならず、而もまた之によりて利導せらるゝとあり。之に反して縮小退守の主義たるや、一に退步を意味し、單にこれが世とならんには國家の進步は甚た覺束なきに非ずや。然れども活動すべき國運は永く退縮を許さゞる也。保守的反動漸く弛み、日清戰爭なる國力試金石は爰に現出して、國是再び雄飛せんとして、彼戰爭の成績の政略上やゝ不首尾なりしとは、また聊、か國民に退縮の氣を與へたるとなきにしも非ず。由來鎖國の遺弊は、日本國民をして、畏縮し易き國民たらしめたり。痛嘆何ぞ禁へん。然れども今後の日本國是は、外邦環視して其擧動を窺ふからには假ひ如何なる事あらんにも、既に退縮主義に陷るを許さゞるなり。されば此時に際して、いよ〳〵奮つて舊習たる偏狹國家思想を國民の衷心より排除し、上代祖先の雄志を紹ぎ、世界的思想を以て、世界文明の中流に棹さすの大氣象を興起せざるべからず。之を奬むるの責、大に敎育家の上に在りて、而して悲哉、今日の敎育家多くは偏狹なる國家思想の舊壘を墨守して、之を以て子弟を敎へんとす。開開進取の國家を、將來に繼續せしむるが爲の中保者たる敎

育家にして、鎖國の弊竇を陋守するの過を喜ばんは、豈に怪しむべきの至りならずや。加之ならず、戰爭以後に於て、自國尊大、隣邦蔑視主義の國家思想の、勢力と敎育界に增さんとするの觀ありて、憂ふべき戰後敎育界の一大弊處實に爰に存す。

曾て西園寺文相が其位に登りたるの當時國民の思想の世界主義ならざるべからざるを說き、敎育上の義理を示して、

今の世界は是れ生存競爭の世界なり、宜しく世界の全般を達觀し、以て列國の競爭に敗れざらむとを期せざるべからす、徒らに大和魂を口にして、世界の風潮に後るゝが如きは我れ取らす

といひ、いふ所即ち偏狹なる國家思想の、將來國是の爲に頗る執るべからずとにてありしに、いはれなくも反對の聲四方に起り、文相は國家主義敎育を排して、國民を敎ふる、世界主義を以てし、遂に自國の尊榮を忘却せしめんとすといひ、甚だしきは、文相の言、之を帝國風致の爲に慨すといひ、今日列國との競爭場裡に對峙するが故に、於是乎大和魂を要するは彌よ大なるに非ずや、然るに何ぞ之を放擲せよといふやと難じたり。文相が所謂大和魂は偏狹なる國家思想の謂ひなり、反對論者の所謂大和魂もまた然り、もし然らずして、雄大濶達なる國家思想を意味すとせば、世界主義なるものと、何の逆ふ所あらんや。而して彼の大和魂の精美を誇るもの、誇る所那邊に在りや、左の如きは實に其美要をいへるもの。

我國は世界に於ける最も先進なる國の一なり。夫の目下勢力の隆々たる歐米列國の如き、我より之を見れば、其年少なるも、兒孫にだも若かず、而して形而下物質的の進歩は彼れ或は我に勝るものあらん。然も道德上の智識は遙に我下風に立つ。

我の泰西に取るべき所は唯々形而下の事物のみ、彼の精神的の動作たる道德の如きは、之を保維し、之を擴張し、進で泰西列國を感化する可なり、何ぞまた彼の醜風汚俗を輸入して我固有の道德を溷すに忍びんや。

と、泰西は醜風汚俗の國、我、厚德美俗の國との無鐵砲なる暴斷は素より取るに足らず、さる暴斷をなして他を罵詈する丈けにても隨分君子國民が厚德の行爲とは云ひ難し。而して我彼を醜風汚俗と詈れば彼の我を見ると亦然り。公平の判定を待たば、孰れにか其采配を揚ぐべけん、鳥の雌雄は分ち難きものなり、我等大和魂を以て威張るべし、英國人は英國魂を誇り、獨乙人は獨乙魂に誇り、米國人もまた米國魂を誇る、國として何處にか國魂を有せざるものあらんや。此等相競ふて、其中雄大豪壯の氣に富むものよく勝を制し、偏小狹量なるものは敗る。然れども我大和魂の美は他の國魂の能く及ぶ所に非ずといふか、とは唯無益の誇りなり、若かず狹小なる蝸廬を脫して、世界の競爭場裡に雄大を爭ひ、祖先の烈志

を紹がんには、國民教育の道また之に由るべし。國民をして、世界万邦を我懷裡にするの氣象を養成せしめ、爰に宏大無邊なる國家思想を抱持するに至らんと、國民教育の最大精髓たらざるべからず。

偏狹なる國家教育論者が、口を開けば、必ず國家といひ、また忠君愛國を唱ふ。國家といひ、忠君愛國といふ、これ實に彼等の惑ひなり、惑に入るものは其惑へるを知らず、却て之より生ずるの謬見を喜ぶ。教育時論記者もまたこの惑に入れるものか。近時說くが如き、國民の教育は、國家傳來の精神の上に基礎を定めざるべからざるを以ての故に、特に小學時代に於ては、外邦の人物の言行を以て、決して兒童の精神を攻琢すべからずといへる、精慮一番するもの誰か之を惑へるとなさゞらん。說くが中に曰く、

小學校の修身科教授は、純然國人的材料を以てせざるべからず、皇祖皇宗の遺訓たる大道を以て教育するに、豈に佛國人の言行を以て、其教授材料に充つべきの要あらんや。修身科に於ては「孔子曰」「孟子曰」「佛曰」「耶蘇曰」「ソクラテス曰」の語を決して引用すべからず。此等外國人曰くの語を引用するが如きは、即ち斯の道の神聖を瀆すものなり。即ち外國人の言行を引用するに非らざれば、吾が大道に由れる教育を施すと能はずと曰はゞ、是れ自我矛盾の大なるものにして、且つ我が大道は、外國人の糟粕なりと曰ふと、一般なるにあらざるか。

記者の惑へるや甚し。說の要旨、勅語を以て兒童が惟一の倫理經典となすべしといへるは通ず。然れども記者は之が神聖を擁護せんとを欲して、却て其大用を損し、又己を自ら曉らざるの謬見に投ぜり。記者は乃ち儒佛の思想以外に、所謂純然國人的材料を得んと欲するの空望を抱き、之が爲に、また其尊敬渴仰を竭さんとする、皇祖皇宗の遺訓てふ者をして、單に無意義の言に止まらしむ。記者の惑へるやこの空言に熱す。これ又畢竟、極めて偏狹國家思想を以て、彼一派のヒューマニストが唱導する國家教育說の、「支那人は儒教を學び、印度人は梵學を學び、回教人は哥蘭を學ぶべし」といへるを、直譯し、其儘之を輸入せんとするに過ぎざるなり。

教育勅語の訓示せらるゝ處は、天下万世を通じて渝るとなき人倫の大道なり。道豈に古今東西の別あらんや。勅語の教は其道をいへるのみ。然れどもドクマ、信仰箇條が、狹量なる宗教信者を誤るが如くに、偏狹なる國家教育家は、勅語の爲に誤られたり。彼等は事々に之が尊嚴をいひ、之を崇拜するに似たり。然れども其實、彼等は是が大用を害し、此尊嚴を傷けて、これを一箇の偶像となせり。彼等は時に勅語を戴、

いて、其冠となすと雖も、時にはまた之を穿ちて其履とはなすなり。昔比叡山門の衆徒が、訴へあるごとに、日吉の神輿を擁し、王城に逼りて其暴を遂げたるが如くに、彼等教育家は、一にも二にも教育勅語を擔ぎ廻し、所謂狭隘偏屈なる形式的倫理の兇刄を鍜ひて、子弟が精神の發育を害し、國民が自由の良心を傷けんとす。而して己は彼尊嚴を楯として、其敵を禦ぐ、凭て事實の上よりは、勅語の尊嚴は彼等自ら稱する愛國忠君の徒によりて、褻瀆せられつゝあるなり。其罪や彼等自ら之を認識するに及ばずして、却て其非を遂げんとを喜ぶ、過ち其一人に留まらんにはよし、然れども其効化の布く處實に驚くべきものあるは、憂へずして可ならんや。殊に彼等如き偏狭なる國家教育家の謬説が、世界に雄飛活動すべき國民の、戰後今日の教育界に於て、却て優遇を受けんとするは、慨嘆の至りに堪へざるなり。戰後の教育界や、一には慷慨悲壯的教育の弊を歡迎し、また一には偏狭なる國家教育の弊を敬慕せんとす。誰かこの迷夢を破らんものぞ。今に當りて預言者の熱誠を以て起つの大教育家の出現を待つと愈よ切なり。

敵愾心の挑撥

聞說佛國の小學校に於ては、彼獨佛戰爭の際獨乙に割讓したる、アルサス、ローレン二州の地圖を壁上に掲げ無心の兒童をし蚤くより此二州を失ひたるの怨恨を獨乙に向つて、抱かしめんとすと。二州割讓の怨み、彼國民に於ては結んで解けざるものあらん。臥薪嘗膽の憤慨、蓋し越王に過ぐるものあらん。然れども如斯き、怨恨敵愾てふ、いはゞ不健全なる思想を以て、なほ繊弱なる小兒の精神を搖蕩せんこと、教育の道に於て、甚だ覺得し難きの事なり。然るに彼に習ふの盡乎、遼東半島の地圖を各小學校の壁上に掲げんことを主張するの教育家あり、其還附の始末を小學讀本に掲記せんとしたる著者ありしとか。近くは新潟某學校に於て、公然該還附日を紀念せんが爲めに、一堂に學生を會して、彼地圖を示し、其還附始末を語り、鼓舞するに臥薪嘗膽の情を以てしたりときく。此如きことの果して、日本國民の教育に於て誤りを生ずることなきか。國民をして彼事實を紀念せしむるはよし。而も徒らに憐人の怨むべからずして、我國民に於ける如何なる欠點短所が世界建興の大法に衝突せしかを顧みて、後日の慮をなさゞるべからず。然れども今かの思慮なき兒童をして、たゞこの事實を紀念せしめ、濫りに有害無益の敵愾心を挑撥せんこと、苟も思慮ある教育家のなすべき所にあらざるなり。今の教育者多くは教育と政略とを混同し、社會の形勢によりて搖蕩せられたるの精神を以て、移して子弟の精神を搖蕩せんとす、誤れるも亦甚しいかな。子弟を教育するものは、多くの度合までは、冷然として世態と相關せざるを要す。戊辰の役、近く上野の空は硝煙彈雨に物凄く市上の人心洶々たりし時、冷然として芝新錢座にミル、ベンザムを講じたる福澤先生ありてこそ、明治の運命の利せられしも那計なりしかを思へ。また土佐の先輩が、政治上の自由主義を唱て、郷黨子弟の精神を動搖せしめたる今日の結果、彼地の青年よりして多望の學者、有爲の實業家を輩出すること能はずといふに非ずや世流の動搖を以て子弟を導き、慷慨悲壯を以て彼等を教へんとする教育の害毒は、當に如斯に陷るべきなり。彼三歲の兒童をして遽に日清戰爭成績の失敗を知らしめ、漫に隣邦に對して、不當の恨みを抱かしめ、不健全なる敵愾心を興起せしめんこと、其教育家之れを以て過誤なきを得るとするか吾人は我教育界の爲めに自ら大なる失策をなしつゝ、却て得たりとする教育者の滔々として多からんことを憂ふ。

渡航後の大須賀亮一君

白痴教育の視察の爲め米國へ渡航せられたる孤女學院長大須賀亮一君の事情は、本誌の讀者が深く掛念して審らかに聞かんとを欲せらるる所なるべし。故に、其近信中、公け事に關する數節を左に抄出す。

住み慣れし故郷をはなれ慕ひ參らする皆樣と御別れ申候こと故一年の後に再會の樂ある事を思ふの餘裕だに無之千緒萬端の思ひに腸も千切るゝ思ひを致しつゝ御地を發し三十日午後九時當港に着致候然るに移住民規則嚴行の結果とかにて上陸甚だ困難に有之漸く一昨一日午後四時上陸致候上等船客の外は實に人並の取扱は受け不申候

航海中は先づ〳〵穩なりし方にて候ひしも途中懷郷病と船病と眠病と寒氣の襲來に連戰連敗の有樣にて候ひき、

乘船間もなくより氣分惡く相成り着の前日まで伏枕致し其上十日間程も眼球一面血走り讀書だに出來不申醫師の厄介に相成り日々鬱々として沈思默想に時を過候四日目程より雪降りと相成り折惡く防寒の用意としてケツト持參不致候ひし爲め困却致し候

税關の取調べ甚だ嚴しく頭の先きより足の先きまで調べ候位なれば荷物などは一々殘らず引ずり出し候て甚だ困却致候税關吏は小生の荷物を取調べ候中途にして小生の何ものなるやをしきりに相尋ね候も最初の程は何も答へざりしが餘り熱心に相尋ね候故實際を相談り候處其よりは甚だ寬大と相成り彼の書籍なども悉く無税として通過致候

當地鐵道局にても三四割の割引出來申候(以上五月三日)

小生こと其後益都合宜しく相成り來る二十五日東部ニューヨークへ向け出發年末に再び此地へ立歸る都合に有之候

シラキユース及びエルウヰンの二大白痴學校よりは校内に宿泊研究を許され候又ミセス、ウヰリヤムソンと申す婦人は小生がヴアヰンランドに滯在研究致候一切の費用を負擔致度旨申越され候(これは來る十月一ヶ月分に候)

又某々の婦人は小生が皆早々費用に窮せずやと察し十弗の爲換券を寄贈致され候が翌々日又々他より同額の金參り候此等皆ゲツプ氏などの周旋に候

此地より東部へは滊車賃は當神學校長の周旋にて半額にて宜しき都合に相成り候ひしが其後當地の監督ホヰツプル(此人はApostle to the Indians とて中々有名なる人に有之齡ひ古稀を越へ勞に堪へざるの故を以て補助監督としてギルバート氏當州に有之候同氏は目下病中にて未だ面會するを得ずと)氏の周旋にてニューヨークより少し手前なるバツフアローと申す處まで無賃乘車相出來申候やの都合に有之候

當地白痴學校にても小生の他國人なるの故を以て最初は甚だ不都合に有之當神學校長の如きも大に其不親切をつぶやき居られ四五日間程はきまり惡く相感じ申候ひしも昨今はさる心配も無之一同皆少しの隔意なく却て東部に去るを惜み候樣相成り申候小生は再び此地に立歸り候樣相約し候が其節は當校長(目下南亞米利加にあり候)も歸校候に付是非校内宿泊出來候樣仕らんと校員一同申居られ小生は其好意を深く感謝致居候教育は教育心理殊に幼稚園の原理を適用したるものに有之候へば此類の知識あるものは其法を取調ぶるに何の困難も見出さず候たゞそれ五六歲より四五十才にも相成らんが如きもの四百餘名涎れ垂れ衣類を破り或は泣き或は笑ひ机を倒し椅子をころがし注意散漫して凝聚の作用更になく狂せるが如きもあれば死せるが如きもある其間にありて懇篤熱心いたらざるなき教師一同の忍耐には感服の外無之候殊に教頭ミス、バツトラーと申すは中々德望ある人にて教師一同も大に服し居り生徒なども同氏の室に呼び出され氏の懇篤なる說諭を聞くを以て最上の苦みと思ひ氏を母の如くに敬ひ居候

五官の働きを發達せしむるを以て第一と致し居候が教育と種々の實業とを並行せしむるとき効著しとて種々の實業に半日を費し候悉く皆蒸氣電氣を備へ付け大仕掛けに候もこれを我國に適用する場合には斯る莫大の金を費さずともいくらも實業を見出し得ることゝ存候が兎に角白痴教育に於て知育と共に實業教育を施すは知育の上に大なる益あることは眞實に候、」小學校などにて發達の見込なしとて退校を命ぜられたる小供や其他一家内に手をつくる能はずしてもてあまされたるものをば特殊の教育法にて教育せば如何に益あることならんと深く相感し申候併し其困難は中々盲啞教育などの及ぶところにあらず又其費用も實に莫大の額を要す故に當地にては大概皆州立と相成申候當白痴院の如き合衆國にては左程大なるものにしも無之候も彼日比谷原頭に新築中の諸官省位の者二棟之有以て未だ足らず

して更に一棟增築中に候出來の上は更に二百名を入れ候由一州に斯く廣大なる建物の要し候を以て考ふれば米國全州白痴の數實に非常なるものにて候はんが其勢增とも減じ候ことは多年の統計に無之候

アイルランド、ノルウエイ、スウヰーデン、イタリー、フランス人などの子供甚だ多く隨て言語皆相異り候にこれに英語を教へて而して彼それ／＼の教育を施す其困難の程察せられ候

最上級など中々發達致し平常の人と區別出來難き位に有之候小生は此組（重に女子）と至極懇意に相成り候ひしが自分等のみの催しにて文學會運動會等有之候時は特別に招待狀など送り候が其手跡も文面も見事に候歸朝の際は此等の人々の製作品（レース其他）など相送らんと申合居候由

日清戰爭の頃は一同甚だこれに注意し其談話を聞くを以て樂みと致居候ひし由にて日本の地理などよく承知致居候さりながら日本人を見しは此度が始めての由に候が或日地理の教場を參觀致候處教師は一同に小生の日本人なることを紹介致候ひしに皆々珍らしさうに小生を見つめき教師は四千万の人口を有する此小國が四億万の人口を有する大國に打勝ちしは何故ぞと問ひ候處比りに日本の開化國なるが故なりとか勇氣勝れるが故なりとか思ひ／＼に答へ候ひしが最后に一人の生徒小生に向ひ朝鮮は目下日本領なりやと問ひ候故我等の目的は朝鮮の獨立を維持せん爲めの義の戰なりしものをなどて朝鮮を我有となすことをなせんさりながら此島（臺灣を指し）は我等が支那より取りしものなり然るに此地圖には支那と同樣の色に塗りあり早く日本を塗りある色と同樣赤に着色し玉へと申し候處教師も直に小生の意に隨ひ一同も興に入り樂しき有樣にて地理を學び候ひき一事件の起ることにそれを基礎として開發的に教授致す都合に候

我國にても此類の學校實に必用に候さりながらこれには人物と費用とを要し候

一學校に長く止るの必要を見出さず候ながくて十五日間も滯在せば澤山にて候故年末には此地に歸り實地に子供を引受け教育致し且つ校長ローザヤー氏にノーマルとアブノーマルの心理に付き意見を聞き度しと存居候

每週一回校長には教師一同に心理の講義をせられ候が其教科書はベルトランの著書に候由これにても教師の心理學などの知識の程知られ候小生は彼等の智識や其教育上の原理などに感服は仕らず候如何にも其熱心と懇切に教授して怠ることなきに感服仕候（以上五月廿二日記）

學校衛生の取調

學校衛生實施は教育上尤も忽にすべからざるの問題なり。當路者に於て今日學校衛生顧問會議を設け、三宅醫學博士を議長とし醫學士三島通良氏を以て其主事となし、なほ他に九人の顧問を置き、鋭意其取調に從事することとなれり。學校衛生の方針之より大に改善せらるゝものあらん。

日本學生の不健康

三島學士の報告する處によれば、福島縣某尋常小學校の生徒は百分の五十、六は病人にして、また兵庫縣某尋常小學校にては病者は百分の六十、同高等小學校にては病者は百分の四十なりといふ。また東京附近の某縣尋常師範學校の生徒は、廿四年より廿八年に至るまで五年間の平均、病者百分の五十、少きときは百分の四十六、二、多き時は百分の五十五、一なり。また四國の某尋常師範學校にては昨年四月より十一月に至るまでに病者百分の六十を出でさりしといふ。

美術學校と、音樂學校

美術學校は遂に黒田久米の兩畫伯を入れて、洋畫を採用し、其面目今より改まらん。音樂學校は幸田延子女史の歸朝後やゝ世間の耳目を驚きつゝあり、然れども此學校が單に高等師範學校の附屬として、活潑なる進歩をなす能はざるは惜しむべし。國民の教育に於ける、音樂の勢力の如何に大なるかを知らば日本唯一の音樂學校は、當路者に於て之が擴張を計らずして可ならんや。

夏天の教育

陽明、書を讀むと山に遊ぶに若かざるをいへり。然れども、書を讀んで、また山に遊ぶと如何に爽快ならずや。夏天はこれ吾人が天然の教育を受くべき學期として劃せられたり。學生諸氏、其故里の山川に同情を從するの時に於て、または名跡勝地に杖を引くの時に於て、心を澄まして靜で聽くべし。自然は書を讀むに勝さるの教育を施しつゝあるなり。而も此時を利して、故老の經驗に耳傾けんには、益を受くるの最、果た那許ぞや。時として夏期三月の教育は一年學窓の勉學よりも多くを學ぶとあるなり。

雜録

杜鵑録

（亡友片山義三郎氏）

秀野竹文

今年の春は花を都に相觀むと約せしも空なりき、今年の夏は年魚を鮎川に釣せむと契りしも徒ごとゝなり了むぬ、定めなき浮雲のたゞずまひ、うたかたの泡とたち沫と消えぬるこそ浮世なれと君もいひわれもうなづきたるは昨日のよと思ひしに、その言の葉のかたみとなる今日ありと誰かは知らむ、みだりに世を厭ふ人の何地行かむとやすらむ、樂しといふも悲しといふも、將たいかにかせむ、樂しうして笑ひ悲しうして泣なむとは君が常に語り給ふとのはなりき、君は今いづこにかある、塵界を解脫して君は今あなたの雲のかげにやすらふか、さやけき月の影に猒ふてこゝろみに現世をみむとき何の響をかきゝ、何の色をか見る、樂しきか悲しきか、空か虛か、問へとも今や答もなし答ふる聲はなけれどもわれは君が答を聞くなり、われはなげかず、われはかなしまず、たゞ相看むと約せし契の空なりしをうらまむか、うらむといふも女女しきか、こよひは雨そぼふりてのき端につとふ雨だれの音のたゞしめやかにさゝやくのみ、獨居の机の上、君が水莖の跡なつかしく、燈おぼろにして影淡きと夢にも似たるに思むすぼれてとかむすべなきぞうらみなる、遠近方をかへりみれば心みだれて糸に似たり、一たび思ふて君が面影を描けばありくとして君はわがまへにあり、君はわれと語るなり、衷情何を以てか堪へむ、

端なく硯を開きて墨磨り流し淚痕を掬して筆を採れば紙のたゝそぼ濡るゝぞはかなき、嗚呼片山義三郎の君よ、わがこの名を書したるはあまたゝびなれど、亡き人の名としてこゝに書むとすればわれ其感のいと異なりたるものあるを覺ゆ、

君が名を知るは君が郷黨の人々と君が小數の知己とのみ、君が聰敏を知り君が沈鬱を知れるは君が生前相交りしものゝ知るところ、而も君が天才を知り君が眞情を解すると深きもの君が親近を外にして幾何かある、君か親近は情に於てあまりに熱しまことに眞情の奥を解し、天才の高きを知るもの果し

て他にわが兄弟の如く深きものあるか。

多病なるを以て才子とせば君や恐らくばその人ならむ。才子か才子か、泛々浮々浮草の波のまに〳〵咲きにほふて人の目を引かむとし、あるは口賢く色麗しく、よく世波にのりて幸多きを求むる、いかでか君がとならむや。

君は言葉すくなうして、寧ろ人と交るを好まず、快く談ずるをりはいと〻稀にして、獨り思ひ獨り嘯くもの多かりけるをみて、あるは時に君を以て世にうときものとやいひけむ、さなり、世にうときこれ或は君が微笑みて受けし名ならむか。

生れて二十三の短生涯、けなげにおはす父君、やさしくおはす母君、さてはいつくしみ深き兄の君が膝下に人となり、小學を終へて、更に異鄕に笈を負ひ、螢雪の勞つみし日も淺らざりしに、はかなや一朝病を得てあらんかぎりの手あてさへその甲斐なく遂に空しうなりつ、うからやからの涙にただよひて君は遠く去り給ひぬ。

鄕校にありては神童と呼ばれ、何時もその校の榮を一身にあつめし頃比はわが弟の最も詳に知るところ、君が母上はわが母上の叔母にておはせば、日頃親しく行きかひしもわれはむしろ君が聰をき〻君がおとなしきを愛したりしのみ、未だ深く君が心の深底をも知らで過しぬ、それより南北相去る幾年、た〻より〳〵の文だよりもて少かにその消息を迭に交はせしのみなりけるが、君が齡の十九歳頃なりけむ、學の暇を綠滴る故山の夏に放浪して弟と共に夕暮の小川の畔に釣して樂しみけるをり君がわか弟に送れる文だよりの端に書いつけたる國詩の巧にして筆の跡いと美しきに驚き、これよりは君を思ふの情一入深うなり勝りしが、一夜君のわが宿を問ひ來て月影清き窓の下に打くつろぎて弟とともに語り笑ひ興ずるを見て、われもその團欒に入りつ、何くれとなう打かたらひぬ、君は國文學のと問ひ出でけるがその言葉なか〳〵に理ありて日頃の修養の樣も見えわれはほと〳〵感に堪へざるほどなりき、これよりはわれも興に入りて清談曉に徹してあきたらざりけり。

そのゝちは君われを二なきものと思ひけむ、文送るとあまたたびなりき、われもまた君がゆく末を賴もしく思ひぬ。

さるに君學びの窓に餘念なうして一校にその譽をか〻やかしける日のある夕、風邪の心地とて例よりも早く打臥せしが、

明る朝一咳したれば、こはそもいかに、咯痰中に血線ほの見えぬ、君が驚きや如何ばかりなりけむ、醫師許ゆきて診を乞ひ、直ちに京に上りてこの道の名醫にも見せけるに重き病の萠なりとぞ、抑も命か將た天か。この時の君が心根われはいはじ、くすしの言葉たよりて新療法を乞ひけるも、はか〲しき甲斐なし、醫師の言葉をも念じ、われとわが身を思ひめぐらしてか、君は年ごろの望をも抛ち靜養を事としぬ、この時の心は如何ありしか、言葉ずくなの君は深く胸底の情を洩すとなかりき、或はわれも此時病の床にありたるを思ひやりけるにや、學の道を抛ちたるもの茲に數月なりしが、君の枕邊には詩歌集、さては小說など横はらぬ時なかりしと人のかたりぬ、靜養一とせに近きもその甲斐なし、甲斐なきにはあらで、肉づき色艶常に變りたるさまも少く、われから病のありともおぼをえぬほどなりければ、君はなほ文繙きて斯道の奥に別入り、床に臥しつゝも君が思は千古に馳せ夢は時に紫雲にのりて、月の宮居に逍遙し、詩神と相抱やしけむ、その折君は心地よければとて、わが宿を訪れ漫に書き流しける小說『なでしこ』をもて來て示しけるを受て讀みたるにその思を構ふるこまやかに筆の跡さへ香しくて、老手に出でたりと思はしむるほどなりけり、なでしこよ愛らしきなでしこよ、かたみとなりし今ぞ悲しき、

治療の功もはか〲しからず、さりとて寐ふすまでには至らぬに醫師のすゝめもありければ、君はふたゝび京をあとにして山青く水清く人の情もまた純なる故郷の夏に歸り臥しぬ、われもまた病後の修養を御荷鉾の山邊になしければ、これよりはかたみにゆきこふて一日相見ざれば千秋の思ありと君はいひき、君が母上は微笑つゝ義三の御身を慕ふは同胞にも勝れりと常々のたまひぬ。

人には言葉少き君のわれに對しては心の奥までも開きて笑ひ興じ、あるは罵りあるは怒り、世相のきはみを論ひ、人情の秘密を語り、古の文を賞へ、今の弊を罵り、意氣虹の如くなりしとも稀ならず、またある時はしづみがちにしめやかに相語りて迭に感にえ堪へず、涙の滂沱たるを覺ざるときあり、あるは君思ひあたるところありけむ、とても世に賴み甲斐なき身の何をか意とせむ、たゞ一身を以て詩神に捧げまつらむといひしなど顧みれば夢の淡きが如し、

これよりは君、書を繙きて片時だも休ふひまなく殆ど病の身にまつはるを知らず、思念いよ〳〵清くして美想ます〳〵こまやかに、詩心ゆたかに波うちて、書たる筆の跡また昨日の君がものにあらず、

この時に於て、黄金何ものぞ、桂冠なにものぞ、王位なにものぞ珍寶なにものぞ、世の文士志きりに利を網し名を得むとする時、君やひとり讀み、ひとり歌ひて、深く世にかくる、虛名いやがうへに高くして、その心根の蛇にも似たるもの多き時、君やひとり思ひ、ひとり樂しみ、ひとり狂しぬ、君の境や詩境なりき、君の心や詩心なりき、詩人狂ならざるべからずとせば君もまた狂せしか、狂か狂か、情熱やくが如く思念珠よりも麗し、星の流に棹して君は天女と共に舞ひたらむか、

君は詩人なりけり、而も君今やなし、君が魂はそれ蝴蝶とともに行春のいづこの野邊をか迷ふ、

去年の秋金風身に志むそりから、われ事をもて久しく君と相逢ず、程經て君に逢けるが嗚呼天無情、君が面影やいたくかはりぬ、肉や、血や、君それとつて詩神にさゝげむとするか、われは感極つてまた言なかりき、後ち君が文だよりのはしに書つけたるものを見るに

明月に桐の一葉のひとりかな

の句ありき、あゝ明月よ、あゝ桐の一葉よ、

われ去年の冬、再び京に上ぼりて、また君と相逢ふよしもなかりしが、君がおもかげは彷髴として夢寐に入らざるはなかりき、この年の初めつかた、君一書を寄すいはく、

淡雪のふりはえておほせ給ひぬる文届きぬ、珍らしき積雪に童等の怯やしけむ誘れしか影だに見えぬに三日前の新聞と言ふも忌はしきを取り出し廣告まであさり盡し、果ては早や徒然にえ堪へず、煙草入掻握んで、本家のあるじを驚せば生憎會計の整理に孤城落日と取り合はず、さらばそこらの逍遙よと出づるや否や横顏を劈く樣なみかぶ嵐に䏁くも恐れて北げ歸り、亦も埋火かき立つる折しも御玉章手に取りては先つ君が懷しき風丰をしのび、君が温き情は辨々と胸にこたへぬ、都にて都の年取り玉へる君の健在はおもかげもて知る、飯塚の君もさだめし健在の事ならむ……

今年のきさらぎ、われは事を以て鄕にかへりけるが君心地すくれずといふをきゝて心も心ならず、一つには久しく相見ざ

りし間の情をも語らはむとせしに事しげくして果たさゞりしが、漸々にその折を得て君を訪へば、この日、他家にありけるわが弟もおりよく來合せたりしが、襖越しに聞ゆるは清の君の幾月ぶりに來給ひしさへ珍づらしきに、また兄君の來ませしとはあまりのことにて奇しきまでによろこばしきかなと細々としたる聲にてしわぶきしつゝものいふは君なりけり。

挨拶そこ／＼に君が室にうち通れば、君は炬燵によりかゝりて坐し、後には蒲團幾となく積みかさねて君が躰をさゝへ、そのぐるりには新しき艶やかなる書、虫ばみたる古き書などいくつともなく散てあり、弟はその前に座して、物語りつゝありき、

われはまづ、君よいたく無沙汰したり、いかにかし給ひしといひしに君はその首をもたげぬ、こはそもいかにさきの面影いづこにか失し、君は眼に涙を湛へ、ぢッとわれを見つめぬ、骨立ち血枯れて雪よりも白く冷やかなる頬のほとりに無限の情を溢しめつゝ、なつかしかりしよといひし言葉さへ呼吸安らかならず。

われは萬感胸に迫りて言葉なかりしか漸々に氣をはげまし、何くれとなく物語り都のさまなどかたり出でゝ問ひ慰みける

に君はおぼろげなる眸子を半ばひらき、頭を横へて打きゝつさびしげに微笑みぬ、われ十語、君一言、しきりに君が心をゆたかならしめむとしたるに、君は、今日はいつになく心地よろし、こはなつかしき君の來給ひし故にやありけむなどいひぬ、病には勝れじ、この二三日は、われ、わが心神の朦朧として夢とも、うつゝともわかぬ境に入りぬるときあるを覺ゆ、去れど君よ、櫻散る都の行春には必ずわれを待ち給へかし、若葉青葉山ほとゝきす聲清き時は君もまた歸り來まさむ、その時の樂しさは如何に。

といふ君が言葉はとぎれ勝ちなりき、嗚呼君はこゝに至りては常の聰きにも似で、その身の今如何にあるかを知らざりしなり、われは心緒亂れて麻の如く、われ、われを忘るゝまでに思亂れぬ、なつかしく、愛すべく、日頃弟とも思ひし君、なづかしく愛するの極み、われはほと／＼胸迫りて久しく相對するに堪へざるをおぼえき、其あくる日は都に出でねばならぬ身の君が痩たる腕をも強ゐてもとゞめむとするをいなだめて嘗に永訣を期して別れぬ、面に笑ひ、心に泣きて相別れぬ、當時を思へば九腸寸斷せむとす、

げにその日こそ永訣の日なりけれ、都に出でゝ十日の後君が

訃音はゆくりなく孤燈の下のわが机上に落ち來りぬ。血に啼く杜鵑の聲われ如何でか聞くに堪へむ、この春契りし人は已に亡くしてその言葉のみ紀念となりぬ嗚呼われ唯に向てかまた彈琴せむ。(完)

一家の私言固より女學の讀者にさゝぐるの價値なきもいささか亡友の面影を記して衷情のかたはしをもらするのみ稿は五月初旬に成りしもの、信曙す。

病餘小吟

曲浦生

スフィンクスの謎語

埃及の神話にスフィンクスといへる一大怪物あり。この者有翼獅身、自ら生命の秘義に通ずと雖も、未だ曾て之を人に教へず。常に道傍に蹲居して、人の其傍を過ぐるとあれば、忽ち奇怪の謎語を放ちて、其解明を求む。素より至難の謎語は多くは之を解すると能はず、解する能はざれば、則ち其不幸なる受驗者を捉へて、直にかの怪物が、呑食の犧牲となすと傳ふ。思ふにスフィンクスたるもの、昔に過ぎし埃及の神話にのみ語り傳へらるゝものならんや。人々世路の行程、其左右到る處として、誰か各種の此怪物よりして、至難の謎語をかけられざらん。然れども多くの者はこの謎語を解せんとだにせで、飽くもなき怪物の贄に上りつゝあり。スフィンクスは蓋し人生發達の試驗者を意味す。彼が謎語の人生試驗問題は、人の一歩を發達するごとに、更に困難を加へ、これに首尾よく打勝ちたるものにして、はじめて至人の樂しみを味へり。

人生行路の試練はみなこれスフィンクスの謎語なり。之を解し得ざるもの、みな其餌となる。爰にまた其スフィンクスに多くの別れあり。中にも貧苦てふ名のスフィンクスが、問ひかくる謎語の、如何に解し難くもあるとかな。凡愚の徒らにこの怪物の口腹を肥やすに過ぎざるは勿論の事なれども、古來多くの傑物偉人が、其謎語によりて、此スフィンクスの秘して告げざる、人生の秘義を曉らんが爲めに潜心沈思を勞するも、不幸庖丁綮肯に中らざるが爲めに、果なくも彼が毒牙にかゝると、焉ぞ悲痛に堪ふべけんや。有爲正大の士にして、一朝氣瘞え、志砕け、不仁の行に忍び、不正の富を貪り不

義の粟を食ひ、天下の清流に泥濁を投ずるに至るもの、一人として誰か貧苦のスフィンクスが謎語を解し果さずして、遂に其犧牲となりたるものに非らざらん。然れども之を首尾よく解し得たるもの丶樂しみや如何。蔬を啜ひ水を飲んで、其歡盡きず、白屋の夕、薰風微に、月光靜なるを見ずや。

富貴てふ名のスフィンクスが口腹は、勞せずして常に肥えたり。其謎語を解し得るもの千人中一人なるも亦稀に、彼貧苦のスフィンクスの餌は、兎角にして免れんとを欲して踠くとなれども、此に至りては、人々昏迷酖醉、自ら犧牲たらんことを求めて其齒牙の間に跳り入るなり。

事業と生死

われ幾度か悶へて苦しめり、この痴愚非才且つや羸弱の者、世に生きて果して何事をかなし得ん、碌々この空間を塞めこの時間を消し、貴重の粟を食つて、無益の生涯を營まんと、天地神明に向つて甚だ恥づべきとなす、若かず速に塵に歸し去らんにはとて、衷心日に幾度か煩悶して、而も未だ狂斷するを能はず、坐して更らに碌々の生涯を竭くさんずるの愚を計りき。我たるもの果して某の事業をなすべきものか、我愚は之をなすに堪へざらん。且つや事業其者たる果して成就せられざるべからざるものならんには、豈たゞ我をのみ要するものならんや。詮ずれば我たるもの丶、世に存すると存せざると、何の差異かある。されば我の存せざるに於て却て、自家は浮世の苦界を脱し、天地はこの無益の蛆虫を喪はんにと、如斯くに思ひ、如斯くに計り、愚は愚を致へて、迷裡に沈落するといよ／＼深くして、其時忽然我を敎ふるものあり。己が生命を別ちて事業の存するを見む、當に如斯の迷想を抱くべし。知らずや、人の事業とは先づ天地社會に對して奉ずるの事に非ずして、己が生命の繫がる處に非ずやと。醒夢一番、嗚呼然なり、我れ死にたるまゝにながらへて死なんには事業何の用かあらん。苟も一日の生命もなほ生きて而して後死なんとを欲せば、我はその一日の事業をなさゝるべからざるなり。事業に忠勤なるは、即ち眞に世に生くるの所以。事業なきは死せるに等し、愆て數十年生き永らへて後、地下三尺一杯の塵に歸さん日なり、實にや矯兒ルーサウの言ひけん如くに、その數十年が間既に死にてありつる遺骸の墓に入るの時

たるのみ。吁我は今天地神明のなほこの痴愚非才また羸弱の蛆虫に等しき輩をも、殲さゞる所以に察して、生きて後死なずんば、決して死し得べからざるを悟りぬ。故に吾人は假令欲せざらんも、事業に奉せざること能はざるに至れり。假令これが爲めに、この可弱き肉の生命は、更に幾年の齢を縮むることあらんとも、なほ可なり。我が爲めには死にて百年を永らへんよりも、生きて一日の世を見んことこそ却て望ましきなれ。

人生に奉ずるの樂

往年學窓を共にしたりし知人と、幾年を經たる後ゆくりなく再會することあり。互に現在の己を示して、舊事を談ずるの時予は先づ、昔日の愚を回顧して、慚汗膚を洗ふが如し。予の如きもの素より三日相見ずんば刮目して俟べしなどてふ、さる目醒しき才能あるの分際にあらず。然れども彼人を相逢ふてや、舊事悔恨の情、今更なるもの、倩ら觀ずれば、予に於て昔の愚を悟り得たる丈の、多少の進歩ありしに非らざるかと疑ふ。我得たる救は實に此に在り。彼友によりて、當年學窓の俊才が身の成行きを知り、幾度か胸を撫して悲嘆し、反へさうしては、更に我救を感謝す。ア、彼謹直を以て塾中に名あり、先輩も之を信任すること一方ならざりし才子今は如何、那の行ひに一生を誤りたりといふに非ずや。はた又彼俊邁の青年、彼勤學の秀才、今多く蹉跌す。殊に痛ましきは、我を眞理に導くに勞したる其人は、一旦の失敗より現に世流濁々の中に沒落して、回顧の悔未だ起らずと聞くことなり。然るに翻て我自から當年を顧みれば、己れは實に塾中の劣才曾て有望の書生として先達の囑望を辱うすること能はざりしもの、思へば彼儘にして打過ぎ行きけんには、今日は當に社會の害惡とこそ成り果つべかりしに、何等の幸福ぞ、よしやこの世に生きて、甲斐なき烏滸の身ながらも、さる禍運の深淵に沈落せずして、なほ碌々の生命を貪ぼるを得るをや。天惠我に滿ち、天福我に豊に、不肖の己れ、微なること一樣の光明の、常に由るべきの道に前程を照せるを認め得るが故に、多くの誘惑の日夜襲來するにも、これに打勝つの勇邁あるにはあらざれど、なほ迷路邪徑に伶俜せずしてあること、如斯きは我實に救拯を受けたりとして感謝熱情を旻天に致さずんばあらず。我れ元來人に勝れたるの才德あるに非ず、これを感ずれば屢々苦悶

憂憤の情激して、世を厭ひ人を恨まんずるの愚をなすと雖も、飜て我得たる救拯の天惠を考ふれば、劣才の一字を盡し、一句を綴り、一業に勵み、一事に任ずるも、みなこれ人生に奉ずるの所以なるを覺悟して、之を感ずるの爽快なる、我に於ては即ち道を聽くの樂しみあり。嗚呼我れなほ弱冠と雖も、往事を回想して、よく其屢々なる過ちに免れたるを思ひ、更に人生に奉ずる今日の樂しみを感ずるや、我衷心は熱して、救を受けたるの惠福に感泣せずんばあらず。我得たる救は實に是、此外また我の救ひあるを知らず。

時文

流水庵の『シルレル』を讀む

曲浦生

流水庵緒方維嶽君の處女作「シルレル」成り、民友社十二文豪號外の之を公刊するや、予も亦著者の好誼により、一部寄贈の榮を辱うす。沸くが如きの熱情と狂ふが如きの活氣とに縱横其處を擅にせしめたる一篇の好文字、之を通讀するに快味甚た油然たるを覺え、今に於て予も亦シルレル其人の洵に敬慕すべき所以を學びぬ。

予の如きは素より文壇のプロダクションを品隲なし得るの權能を有するものに非す。殊に況んや其名をきくと既に之を久しうすと雖も、未だ其性行に就いて知ると少しなだに知らず、また彼の獨乙文學者たるの故を以て其詩文を味ひたることさなきものに於てをや。予の如きは「ロイベル」「ウヰルヘルム、テル」の何たるやを知らず。流水庵の「シルレル」は實に、熱誠熱情の詩聖シルレル其人の影を予の上に投じたる第一のものなり。然るに今焉んぞ此書に加ふるに是非左右の評言を以てすることを得んや。流水庵の觀得したるシルレルは、眞にシルレル其者を盡くして餘蘊なきや否や、詩美神の猟に發現したるもの正に著者のいふが如くにして、誤りなきや否や、予は實に之を知らざるなり。此等に關しては、世上博識の士の之を論ずるものあるを俟たんのみ。而して予は流水庵の『シルレル』に對し、多くの敬服と多くの信用とを措くと雖も、其シルレルを以て、君の觀察したる限りのシルレルなりと思へり。これ一つには予自ら嘗て此詩人に就きて、知る所なきの不識に坐せん。然れども偉大なる人は由來多面多角なり、而して之を觀察する者は亦、各の心を以てするが故に、彼此の見解に徑庭なき能はず。さればかの某の偉人物を捉へて之を評論するもの、己が心念に映ずるの彼は如此しとせばよし、もし然らずして、渠は正に如此なりきといはゞ甚だ誤れりとす。流水庵のシルレルに於ける、予は其評論の意の彼誤りを學ぶものに非ざるを信ずるが故に、更に此書に多くの敬服信用を辭する能はざるなり。

流水庵の其詩に於ける、また其文に於ける、吾人は屢々之を我讀上に誦して、既に其才氣の爛熳たるに服して、また其情熱と其活氣とに盈てるに感ずるものなり。予某は君を評して故人透谷子の風ありと稱す、知らず、其果して然るや否やを。予を以て之を見るに、君には滿分の情熱ありと雖も、之れが爲めに、彼世を果なみ、天を恨むの一方に陷らず、加ふるに多くの宗敎心に富めると、是れ正に君の觀じたるシルレル其人に肖似するものに非ずや。『シルレル』中には、流水庵自らもまた活動しつゝあるに非ずや。然り眞に其故を以て一篇の文字、活氣情熱人を動かすに足るものあるに非ずや。

流水庵の文字は、未だ許すに圓熟練達を以てすべからず。『シルレル』の如き、所謂民友社調を帶びて、生硬拮据の字句、聱牙奇異の文章なきに非ずと雖も、君の文字は想を以て讀むべし。其想既に盈ちて溢るゝと縱横なれば、讀者文疵の如何をいふの隙なきなり。

贅評暫く之を措く。要するに流水庵が、彼常に僧衣を纏はんとを欲して遂げず、遂に劇場に立ちて、大說敎を千古に說示する事々たると喬松の如き偉大なる詩人シルレルを描きて、今日の蓬蒿蕪雜なる我文壇に示すもの、豈に故なくして可ならんや。今日は實に雛れよりも優りて、シルレルの如き詩人の出世を希ふものなり。君が、『シルレル』豈に此世に裨補する所なからんや。而も之を文學上の立場よりしていへば、此書や流水庵の處女作として多分の成効を奏したるものといふべし、

◎國運の進歩と基督教　田川大吉郎著　警醒社版

これ著者の曾て著はしたる「第二維新と基督教」を再校訂正し、之に序論を加へたるもの、論ずる所要義は基督教たゞよく所謂第二維新を成就せしめ、日本國運をして登固なる隆盛を得せしむべしといふに在り。

◎講壇の英傑　増野悦興著　警醒社版

福音の宣傳の爲社會の改良の爲めに、講壇上万丈の氣焔を吐きて、滿天下を震動したる、米國千古の偉人物、ヘンリー、ウオールド、ビーチャー氏が一生の歴史を、談話躰に說述するもの、是れこの講壇の英傑なり。單に一小册子に過ぎずと雖も、さりて之を讀まば、爲に益する處多からん。

◎食事時　近澤武雄著　警醒社版

米國醫學博士デユー氏の「生活餘論」を摘譯したる小册子なり。疾病治療法衛生心得法を載す。

◎看病の心得　平野鐙女史著

神奈川縣藤澤醫師平野某の妻女鐙子氏の著す處、「看病の心得」新に出づ。女史は夙に非常の苦學を積みて、看護學を勉强し、親しく看護の任に當り、後現今の醫家に歸したるの人にして、其術業と實驗とを盡くしたるの此書なれば、之を以て簡易なる看病法を學ふに尤も宜しきと、既にいふを俟たざるなり。

◎小說家　独寄作　春陽堂版

独寄往年の作、今や春陽堂の手にかゝりて衣服を替ふて、市場に出づ。之れやまた世俗の愛顧を蒙ぶること多からん。

◎大村少尉　眉山作　春陽堂版

眉山のキヽ物作の一、素より文壇の製產物として、云ふに足らねども、どこかに眉山丈けの妙はあり。

◎うらわか草　第一卷

文學界一派の青年文士等の今後に毎季發兌せんとする「うらわか草」の第一卷は出でたり。禿木の「地獄の卷の一節」秋骨の「以太利盛時の文明」松茶庵の「ベアトリチエ」韻致頗る高く、藤村の「四花餘香」花圃の「五月幟」一葉の「あきあはせ」瀟洒の文霊すべし、うらわか草、生ひよ、繁れよ、文壇は汝に屬望する處多し。

◎斷雲流水　三宅雄二郎／志賀重昂述　政教社出版

これ兩文士が曾て日本人及び亞細亞の紙上に說述したるものを採錄したる者也。雪嶺矧川の其想に於ける又其文に於ける實に當代の雄なると、誰か之を知らざらん。さればこの書の如き更に何ぞ批評を加ふるを須ゐんや。其想や聞くべし。其文や學ぶべし。

樓主の懺悔物語

都新聞小說欠伸生『總角助六』中の一節

さし俯向いて聞き居たる惣兵衛、此時瞼を押し拭うて溜息吐き『もう何にも云うて呉れるな、惣兵衛も涙が溢れる。稼業の上から云ふ時は、そんな事許しだてしては他の者への示しがつかれど、余のやうな者を情ぶかいと見込んでの頼みと云ひ、浮氣と薄情で固めた此の廓に住みながら、武士の妻と云うても耻かしからぬ心の節、厄にまで爲らうと云ふ心根が感心なれば、余も俠氣を出さずには居られぬ。是につけてもあさましいは此の稼業、人並に情を知ッてはなか／＼出來る事では無い。不仕合せな人の困ッて居るを幸ひにして其の娘を買ひ受け、心で泣いて居るものに白粉を塗せ紅をつけさせ、心にも無い花を飾らせて生身の切賣をさせ、正直なものに薄情な事を敎へこみて孝行娘を見事莫連に仕立あげ、嘘を上手に吐くものを手柄者と賞めそやす、まアこんな稼業が他に有らうか。和女の立派な心を聞くにつけて余は實に耻しい。只々年期の明のを力に、つらひ勤も勤めて居るのに、可なりに賣る太夫は手放すが惜くなりて、困らせて借金させて、樂しみ暮した年季を延させ、是も稼業と平氣に澄して、可哀さうなとも思はず、それで儲けた金で氣樂に世を渡り、旦那殿と人に云はせて大きな顏して居るかと思へば、末來が恐ろしく現世が耻かしい。和女の今の立派な言葉に聽はれて、余は如此こ

さまで思ひ出して、思はず此の通り涙が溢れた。和女の願を聞き入れるも一ッは此の身の罪ほろぼし彼とも云はず今茲で、年期證文がへすほどに、何時なりと心任せに何處へなりと行くが可い。和女も他に倶の無い身の上なれば、外へ出て後困る事があッたなら、何時でも遠慮なく尋れて來るが可い、隨分力に爲りませう』と年期證文取り出して渡せば、主人の情に緒角は愈よ悲しく、禮云ふも言葉少なに嬉涙とどめあへず。

女子教育に對する意見（淸浦奎吾）……	太陽第十二、三號
米國女大學生の自活法（薇陽手仙）……	太陽第十二號
教育普及の實……	時事新報六月二日
女子教育……	同六月三日
女子教育と女權（福翁百話）……	同六月十六日
男尊女卑の弊は專ら外形に在るもの多し……	六月十八日
女子教育と生理及び衞生との關係……	教育時論第四百一號
三十名の女學生……	每日新聞六月三日
工女の缺乏……	六月十六、七日
朝鮮の婦人……	國民新聞六月七日
朝鮮國民の禮俗……	日本六月十二日
女子の職業（印刷局の女工、卷烟草の內職、報知新聞每日連載メリヤス職、等）	
米國女子の職業……	六月十八日以後連載
日本婦人及び社會上の位置（松本君平）……	英文國民之友第五册
女子教育家を警戒す……	教育報知第五百十四號
故巖本夫人及び明治女學校……	ジャパン、メイル六月十九日
靈國怪塊傳（下）S、M子……	自由黨黨報第百十號
基督の家族觀……	福音叢誌第一號
情死の統計（吳文聰）……	統計學雜誌第百二十二號
女武者……	時事新報連載
美人論（浦邊兼好）……	商業資料第三卷第六號

ひと聲はしのびかねてや洩らすらん
月もかたぶく山郭公

莚月

片々

◉**大阪三井銀行** にては中上川彥四郞氏の發案にて、金錢出入方に女子を使用したるに其成績頗る見るべきものありといふ。銀行商館等にて金錢出入、簿記等に女子を使用するの利世人漸次之を認めんとす。女子職業の範圍の擴大は女權の實際に於て伸張する所以なり。また之によりて醜業婦の幾分を減ずることを得ん乎。

◉**伴治子** 曾て濟生學舍を卒業して女醫となり、更に進んで醫科大學に入學せんことを致して果たさず。日夜刻苦獨乙語を學び、今や獨乙語佛國語の完全なる熟語集の著あるに至りたりと。

◉**華族女學校々長** 細川潤次郞氏令孃に按摩を敎ふ。曰く嫁して姑の機嫌を取るに必要なりと。さらば按摩術もまた女子教育の目中に入るべき乎。

◉**一葉女史** 濁り江、たけくらべ、この巾幗の秀才をして名譽九天の功に高からしめ、ことさへぐ唐國人もなほ其名を知り、紅葉館の慈善市女史が手跡悉く淸人の購ふ所となる。

◉**東京大阪** 互に工女招聘を爭つて、術策を盛くすと。工業進步して工女の需用增加す、此時に於て吾黨は工女教育に要を增すや更に大なり。

◉**教育時論記者** 國家各其彝倫を異にす、故に我日本の如く血統を重んずるの國は、彼外邦の如くに、一夫一婦の道義を立つるを要せざるなりと論ず。偏狹なる國家論に香醉れて融通のきかぬ學者先生は、往々にして此種の國躰怪說を唱ふ蟲哉。

◉**盛岡の婦人** 過日芳川法相盛岡に巡視して、秀淸閣宴席に臨む。坐に紅裙酒杯に斡旋するあり。其醜業婦の風儀餘程御氣に叶ひしと見えて、傍に向ひ徐に說く樣、盛岡の婦人は思ひの外品格好し、西京婦人の次は恐く盛岡なるべしとて痛く御感心なりしとか。藝妓の風采御氣に叶ふて、盛岡の婦人の品格頗るよしなどと、甚だ難有からぬ御賞を頂戴して、貴人の名言得たる賢さし、法相樣がつかくの仰せそれに就いても品格を失はぬ樣心付くべしと、得意顏にいひのゝしる新聞のあるは馬鹿らしき沙汰なり。

◉**歸化人** 劉雨田の妻今年二十七歲自子六歲なるものと共に四谷愛住小學校に入りて、アイウエオを學ぶ。

◉**機運** 既に今日の如し。故に女子教育家を警戒するてふ聲をも聞くに至れり。

教育報知曰く女子教育の信用價に今日に回復せられ、其聲價將に次第に高からんさするの時、何事ぞ監督稍や弛緩またるの巷説を耳にす。夫れ眞なるか將た贋ならざるか。霖雨せざるに先だちて須らく牖戶を綢繆せよ否らずは、万雷一下彌の耳朶を劈かんさ。

◎國家教育記者　冷然さして曰く近來女子の教育論稍々多くなれり、よし流行熱さするも決して非ならず。誠に喜ぶに堪へず。夫れ一時を機さして大に其方法を研究すべきなりさ。

◎女爵　華族一兩每に增加するの今日、新に女爵を設けて、勳功の女子を賞すべしさ戲言するものあり。

◎情死原因　吳文聰氏情死の原因四條を舉ぐ(一)佛教に輪廻應報の說ある事(二)主從は一世夫婦は此世のみの緣に非す。來世も亦夫婦さなるべきものなりさの說ある事。(三)淨瑠璃に情死又は情死に類似せる歌曲多くありて、衆民日夜口之を歌ひ、耳之を聞くと(四)演劇に於ても同樣なる狂言多き事

◎美人論　商業資料の浦邊兼好、さて〳〵奇妙の美人論をなせり。曰く盛に美人を養成して、遠く海外に輸出すべし。美人てふ大膽なる開拓者を海外に派遣するは、戰勝後の經營さして、今日の急務なりさ信ず。また蓄妾の氣品を高め、之が自貢の念を惹起せしむる一の獎勵法さして、醜美の等差を附したる紀章を公けの手より附與し、常に胸間に下げしむべく、交際場裡の女王たらしめ、其結果さして男尊女卑の迷夢を打破するとを得んさ。世には樣々の議論をなすものもある事哉

時報

◉華族女學校行啓

皇后陛下は六月三日華族女學校へ行啓被遊れ、學事御臨察あらせられたり。

●赤十字社の貴夫人彰功

日淸戰爭の際宮方の御息所を始め華族大臣の令夫人等は赤十字社の救護員さして諸方に奔走したりしが此程佐野同社長より是等の貴婦人へ金製指環一個宛に賞狀を添へて配贈し以て其功勞を彰表したるよし

●明治女學校義捐慈善市

府下各女學校の代表者八女史の發起に成りたる慈善市は、彌よ去る十九、二十の兩日芝紅葉館に於て催されたり。府下は固より各地方の女學校及び有志者より寄贈せられし製作品は合して一千五百餘品に上りたり。各發起人は夫々テーブルを擔當せられし中にも、瓜生女史は鳩山夫人さ共に福引を、小鹿島女史は令弟渡邊環氏さ共に茶店を受持たれ、他は皆な賣店を管理せられき。其外ブリンス女史は特に外客の爲に西洋ものを取集め、戶川殘花氏及令孃は現代知名の文士が揮毫を紹介し、森島峯、鈴木歌の二女史は花店を開きて大隈伯さ原六郎氏さの寄附せられたる花卉を賣られたるなど、總べて發起人諸氏以外の懇篤なる來助にてありしさぞ。又、近衞公爵の寄附に係る紅葉舞、陸軍戶山學校の義捐に係る軍樂は、特に來會者の餘興さなりて、二日間數千の人々、皆な還るを忘れて打くつろぎ、中には二日さも引つゞきて來遊し、眞さに園遊會の如しさて歡こばれしもあり。近衞公爵夫人が特に案內狀を發せられし爲め、各國公使及び公使館付諸君の來擶せられしも多かりき。發起人諸氏は、慈善市の通弊を歎じ、些さか之を改更せばやさの趣旨にて、賣り方、つり錢、茶店のもてなし方などに特に注意を凝められしかば、來會諸君の滿足淺からざりしさ風聞す。斯て、收益合計二千圓に近く、赤十字社一週間慈善演劇の收益一千圓なるに比して格外の成功なりしさ言傳ふ。明治女學校の感謝の意、察すべき也。

●沖繩の女子敎育

沖繩縣の女子敎育は尙ほ幼穉にして那覇首里等の學校に女子部の設けありしのみなるが本學期に至りて島尻郡の高等小學校に五名の女子卒業者を出し又師範學校に女子講習科を新設するなど追々進步の傾きありさ云ふ(日本)

●臺灣の醜業婦

臺灣自由渡航許可せられて、內地の醜業婦混々濁々さして彼に流入す。痛嘆何ぞ之に堪へん。左の如きは實に彼等に關するの通信數則なり。中央新聞の通信者の報ずる所に曰く。

◎日本婦人の渡航　先月來each船每に內地婦人の渡航する事續々にして臺北市內にて目下二百餘名に及べり此等の婦人は肥前國天草島又は肥後國三角附近より多く渡來したる者にして何れも在鄕中は漁師又は船頭等を相手にして地獄渡世の者の

みにして何れも色黒く手足大にして三十二相ならぬ三平二滿の醜婦のみ其の服裝は五六十錢位の單衣に五十錢位の帶を占め居りて實に婦人と云ふより寧ろ女の化物と云ふべし

醜婦連の大繁昌　右の化物等は各料理店に三人五人宛散在せるが第一着の者を雇ひ入れたる料理店の如きは職工車夫の類我れも〳〵と詰め掛け一時其の門前は人の山を築き頗る勇氣を出さゞれば一寸顏を見る事さへ容易の事では出來ず又幸ひに店に入りたる者も中々容易には其の醜婦の一酌を求むる事をも得ざる程にて何時も大競爭大喧嘩を始め居りて眞に言語同斷の次第なり

また東京新聞通信者は曰く

●醜業婦　渡臺婦の多くは長崎天草等邊のものにして概ね土病に罹らざるはなきも賣淫の爲め臺北附近に在るもの三分の一は黴毒に感染せり

また更に長崎の新報が臺灣出稼醜業婦益々多きを加ふるの影響其他に及べるものを報ずると左の如し。

●婦人の逃走益々多し　本年初春以來婦人の逃走沙汰多く其筋へ屆出つる分も例年に比し多數なるより餘程注意中なりしが去る四月より臺灣自由渡航を許さるゝや頓に逃走者多きを加へ毎日平均二名強に當るの屆出なりと其婦人は重に中等以下寧ろ下等社會の娘にして十六七歲以上のものなれば多分は臺灣への醜業と出懸る耻さらし女ならんと云ふ

●酌婦下女の拂底　過般來酌婦下女を雇入れんとするも應ずるものなく奉口人口入所上がつたりやとなるのみならず料理店貸座敷旅人宿又は奥さん方の大困りなりとは全く別項の逃走沙汰に起因するものならんか

なほ聞く所によれば東京の待合女將の某といへるは、近頃十數名の醜業婦を引連れて、臺北に渡りて、彼處に料理屋兼藝妓屋を設けて、醜業を營めりとか。フオルモサの美島我有に歸してより、是が收利の先鞭を著くるもの醜業婦輩なるは恐ぞ悲まざるべけんや。

◎婦人慈善會　是迄東京知事の交迭ある每に新任知事の夫人會主となりて慈善會を催し其收入を以て養育院福田會其他に寄附する例なれば久我侯爵夫人は去月中會主となり此催しある筈のところ都合により來る九月開會の事に決したりと

◎横濱婦人慈善會　は先年同港根岸に慈善病院を設け無告の患者を施療し傍ら本會の事業として貧民を救助し來りしが尙其擴張費に充つる爲め本月十八日午後四時より横濱會館樓上に於て慈善音樂會を催し大越稅關長の夫人を始め內外淑女令嬢頻りに之が斡旋をなしたり。

◎女子高等師範學校生徒缺員　同校に於ては生徒に七名の缺員あるに付き來る九月三日より同校に於て體格の檢査及び國語漢文本邦歷史數學裁縫習字圖畫音樂の各科に就き試驗を行ひ合格の者は同月十日入學を許す由尙入學志願者の資格は年齡十六年六ヶ月以上二十一年六ヶ月未滿にして尋常師範學校二ヶ年中の課程を終へ若くは之と同等以上の學力ある者なりと。

◎婦人部慈善會　東京感化院にては此度新に女子部を設立する事に決定したる爲め曩て設立しある同院慈善會中に特に婦人部なるものを設る爲め去日頃東京ホテルに於て同會の委員會を開き幹事を撰定したり。

◎彥根婦人會　江州彥根貴婦人の組織せる彥根婦人會にては去廿一日同地長松院內に於て第一回總會を開きたり會員及贊成員（男子）等百餘名の出席あり先づ規則を議し當分假規則を採用すると、役員は創立委員十名を以て之れに充つるとに決し夫れより發會式を擧行して散會せり。

◎貞女賞與二件　其一人は山形縣米澤市御小者町士族西堀つれ子他の一人は尾張國知多郡豐丘村深谷龜太郎妻よしにて兩人へ其縣知事より賜はりたる賞賜狀書左の如し

山形縣士族　西堀つれ

資性孝貞屢々不幸に遭遇し而も克く艱苦に耐へ殊に明治廿三年夫病に罹り尋て死亡し爾來婦女の身を以て一家を支持し子女の綱育を怠らず同年姑又病むに當ては銳意承歡至らさるなく其操行終始一日の如く洵に奇特とす依て爲其賞金五圓下賜候事

明治二十九年五月十六日

山形縣知事　正五位勳四等　木下周一

愛知縣尾張國知多郡豐丘村

平民深谷龜太郎妻　よし

資性温良品行方正にして歸嫁以來能く婦道を守る先に義兄不治の病に罹り尋で夫も亦重病に罹れり然るに家素より貧困なるを以て日夜孜々以て家計を經營し且つ看護到らざるなし而して其嫂に事ること恰も其母に事ふるが如し多年其志操を變ぜざる洵に奇特とす仍て爲其賞金貳圓下賜す

明治二十九年五月廿七日

愛知縣知事　正四位勳二等　時任爲基

◎女子高等師範學校　にては尋常師範學校女子部高等女學校教員志願者の爲めに撰科生なるものを設けたり。

明治廿九年四月度全國各女學校卒業生一覽表（二）

○東京府高等女學校卒業生四十人

辻　たけ　渡辺　つが　尾谷くうえ　濱口　くま　山縣　しげ　三谷　きみ
香阪　さつ　都築じやう　高田　ます　岡田　よれ　饗田　さだ　三木田ひさ
佐藤　みち　藤澤　ひろ　西宮りやう　服部　なか　福原　たま　江守　しん
内田　すゑ　平林　かよ　小關さもゑ　伊奈木たきえ　松村　りう　天沼　よれ
小林　はな　山内　ささ　平川　つれ　武井　はつ　島田　ろひ　齋藤　はつ
田中　よし　福井　しげ　關口　まさ　乃中　なほ　渡辺じやう　後藤　てつ
中島　さだ

○頌榮女學校卒業生一人

加藤　みつ

○フェリス女學校卒業生九人

高等科卒業生四人

川村　たけ　橋本　八重　杉田　ゑい　井村　えい

本科卒業生四人

岡田　さも　杉田　みち　今井　そで　松井　やす

特別科卒業生一人

アイリン、スカット

○京都府高等女學校卒業生七十四人

本科卒業生三十六人

石川　しげ　岩村　勝子　伊佐　きみ　林　まさ　豐田　ます　河原　桂
川島　きぬ　河西　はる　吉田　つれ　瀧野　もと　大海原ひで　熊澤　三輪
山口　明子　正岡　佳江　松尾　直　小泉　かれ　小林　たま　栗飯原はる
栗野　みつ　阿部　幸　北國　らく　宍戸　さも　廣瀬　達子　森　誠
以下英語を欠く　稲葉　玉蟲　伊藤　絹江　伊藤　八重　戸田　絹江
殿村　やす　財田　たれ　川中さだよ　窪田　つれ　園部　名草　近藤　よし
佐藤　稙野

補修科修了生三人

總宮　ふち　香川　良穎　まさ

裁縫科專修科卒業生三十二人

伊藤　こう　五辻　たか　石川　ささ　林　たみ　初田　はる　帆足　さき
富田　勝子　尾崎しげの　甲斐　てふ　高橋千世子　河苗　はる　吉田たな子
竹岡　千鶴　恒川　三枝　永島　みれ　大角　初惠　大倉　丈　大澤　させ
大崎　みの　大石てるを　松岡　たま　松下　千代　小森　さき　荒川　くめ
佐々涙りむ　木村　しづ　北大路はる　三谷　さみ　三好　久野　平岡　きし
菱木　さも　森島　千代

音樂修了生三人

林　たみ　栗山　壽　山下　満野

○市立大阪高等學校卒業生七十四人

本科卒業生二十八人

上木　ひさ　安原　もと　本山みさを　岡山　さみ　小野　はつ　中村　きわ
石川　ふみ　長洲　よの　大森　この　森鼻まさゑ　木下　むつ　北村　あい
齋藤ちさせ　水野　ふじ　進藤　なか　大藤　めつ　中島　しづ　西山　しづ
杉野ならめ　芳賀さださ　折口　あい　栗田　かつ　牧山　たづ　島田　さき
本田　よし　田阪　りつ　茂木　くら　藤田　きよ

技藝專修科卒業生四十三人

船越　りよ　下枝しづゑ　石原ちよの　高橋ちよの　小松つや井　松尾　せい
澤野　ちか　今室ふさゑ　高梨　なな　戸田　くま　長谷川はる　高久　ちか
辻子　かれ　内池　せつ　西井ゑいち　星野やへの　大西　つた　今井　やへ
石川　ふさ　岩村　そめ　山田いさを　前川　この　南大路みつ　中村　たか
横山　ゑい　上村　かつ　西村　かつ　鹿島　つち　濱谷　直　田代　かれ
高田　もと　須藤　なほ　高木　ゆた　武田　ちゑ　田島　ひさ　辻本　ゑう
中宗　かつ　川井　しげ　尾崎　こと　阿部　きく　戸田よしゑ　石田　いく
柴田　なか

保姆養成科卒業生三人

石川　のぶ　松下　ます　播磨　たま

○福井縣高等女學校卒業生二十八人

野村こささ　梅田まさな　加藤　ひな　三谷　ちか　山岸　ひさ　鎌山　ふく
長井　さき　高木じゆん　關　はま　塩見　さら　三田村ちよの　長尾　てふ
尾岡　ます　中野しづゑ　小玉　うた　岩佐こゆう　藤岡　きた　松田　てう
木村こひさ　栃尾よしを　加藤しげの　米澤こひで　永井こさき　正田　りう
黒澤　たゑ　櫻尾　さく　田邊　さめ　荒川　よし

○高知縣高等女學校卒業生二十二人

寺村　清水　楠島多現猷　弘由登喜衛　下村　倹於　田中　喜代　中村　久於
久万登麓江　澤村　鹿代　下方登喜代　下司　守雄　美濃部　貞　益　富

日本宗教界評論之評論

日本宗教

六月二十日刊　第十二號要目

本號には、日本宗教の前途如何に對する、加藤弘之、内藤耻叟、釋宗演、北野元峰、海老名彈正、谷本富、アーサー、ロイド、山路彌吉、姉崎正治、渡瀬常吉諸氏の意見を蒐録して光彩陸離、

○敢て告ぐ　社説
○基督教々師に與ふ　社説
○德義的問題に就て世間大方の解釋を求む　加藤弘之
○基督教と實業　增野悦興
○天地の愛　百合園主人
○五山文學一斑　横井雪菴
○宗教界の伯爵たる君
○教事些語（時代の精神と宗教○宗教は保守的にて又進歩的なり○宗教家の適種生存）　觀潮菴
○力士大浪の坐禪に就て　森大狂
○思潮には佛教因果說論爭を始め現今基督教界の形勢論等○時流○批評等例の如く豐かなり。

口繪　鎌倉の大佛の圖

一冊　定價八錢、郵税五厘、六部前金四拾五錢、郵税三錢

發賣元　東京麹町區下六番町六番地　日本宗教發賣所

注意　本誌は今後も引續き發刊、來七月より第二卷第一號とす、從來に比して更に一層多趣多味となるべし

西京の無名氏に告ぐ。もし幸ひにして愚書を寄すべきの宿所を示し玉ふあらば、此上の悦びなり。　綴本生

芙蓉峯

第參號目次　六月廿日發行

●芙蓉の雪○大人手中の鐵鞭○臺灣の教育及び傳道●寒梅の林○人間の運命「上」（翔峰生）○王朝末及び源氏（y．n．生）○我が心何處にか托せん（日木石）●野外の草○臺灣實見談（菅田勇太郎）○臺灣人借服英氏（一會員）●シオンの月○押川先生說教の大意（默堂主人）●千古の風フランシス、ザビエの書翰○ステヴエンの心膽○林梅林の諷諫●晴夜の露○羸癈病者の人を懷ふ（一迁生）○詩二首（翔峰生）●幽谷の花○先哲格言●寄贈雜誌●雜報○歌作

定價一冊金四錢、郵税金五厘

仙臺南六軒町勞働會塾内

發行所　芙蓉社

岡田起作先生編并書

◎女子習字帖　全八册

○第一楷書府縣國名　既刻 定價金十錢
○第二楷行體日用文字　近刻
○第三行書日用文字　近刻
○第四行草體日用文字　近刻
○第五草假名烏丸帖　既刻 定價金十八錢
○第六假名烏丸帖の續　近刻
○練習科の上假名雅文　近刻
○練習科の下假名雅文　近刻

右は女子高等師範學校教務囑托岡田起作先生が多年の經驗により高等女學校及び尋常師範學校女子部等の敎科に充つる爲め書かられたる習字帖にして其の書體は先づ極めて正格に楷書より始めて假名に至る迄の間に著しく等使ひの變化を感ぜざるやうに知らず識らずの中に轉換せしめて終に假名の妙處迄を知覺せしむるをさとせられ候故に高等女學校第一年生には楷書を同しく柔らかにし第二年生には殆んど楷行體に第三年生には行書第四年生には行草體第五年生には草書假名第六年生には假名補習科第一第二年生には稍高尚なる假名にして他日各自の嗜好する古人の（貫之道風行成**尊圓親王**）等の法帖に移り易きやう勖めて僻のなきやうに書せられ候ものに有之候此度弊店乞て發賣化候間何卒公私の女學校に於て御採用之程希望の至りに堪へず候敬白

金昌堂主人　敬白

右大賣捌所　女學雜誌社

女子習字敎授新法の大意

書は以て己れの心性を露はすものなりとは古人も已に之を言ひき故に男女互に其性を異にすれば即ち其性情に適し德操に應すべき字躰を學ばざるべからざるは言を俟たざるなり然るに今や女子にして往々男子風を摸して放縱疎暴なる字を書し其品性に適合せざるをも顧みざるもの尠しとせず是れ余の甚だ遺憾とする所なり抑も婦人にして其性情に適する書に妙なるに至らは一見して其人の品格の高尚なるを相見すべく苟も之れに反すればたまく以て其人を輕蔑するの念を惹き起さしむるに至らん此に由て之を觀れば其書の良否は以て其人の德性を長出するに足るべし世の令閨淑女の假名字を修めんとの志ある方の爲めに教授をなし彼の最も婦人に適應せる文字を習練せしめ一は以て婦德を今日に涵養するの助となし一は以て美術を將來に進蹄するの階梯となさんとす

岡田起作

丹後の岡田生起作余に從ひて學ぶこと年あり人となり質樸謹厚にして操守堅固なり假名字文字を善くす嘗て女子習字法を發明し之を試むるに意の如くならざるなし來りて余に質す余乃ち私家女子をして就て學はしむ頗る其効績を獲たり生廣く之を世に布んとす因て余か實驗する所を擧けて四方君子に告ぐ生の性質技藝の如きは觀る人亦自ら之を知らむ

明治廿四年　綱生

重野安繹志るす

余常謂、爲女子取師、不可不選其人。其人苟不正、縱令學得其學藝、亦或至敗其德操矣。岡田生起作久遊余門、去歷任師範校中學教員。其學藝固不俟稱道、其爲人篤實而温和、方正而謹愼。蓋兼學德者。非此則不足以爲女子師矣。因書一言於其授業法後、告世爲女子選師者。

明治辛卯春　中洲　三島毅

巖本嘉志子英文集

右英文集巖本嘉志子の肖像（アートタイプ）明治女學校々舍及學生の圖（銅版）、傳紀等を添へて出版せり、有志者の購讀をまつ

一册正價六十錢、郵税四錢

發賣所　東京　女學雜誌社

女學雜誌定價表

前金	
壹册價	金拾錢
一年前金	金壹圓

（無郵税）

明治廿七年一月十四日内務省許可
明治廿九年六月廿四日印刷
明治廿九年六月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式合社秀英舍第一工場（電話十九番）

布川靜淵　小此木信一郎　二氏合著

俳諧史傳

和製美本　紙數三百二頁　中本全一册
定價廿七錢　郵送税四錢宛　許郵劵代用

俳諧の道近頃大に興り、去年此書を公刊せし吾社の微志をして幸に酬いあらしむ、幸慶何ぞ及ばん。それ、俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七有言、尺幅の裡に無限の烟波渺々として際なし　俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞徳となりて諧謔を擅にし、西山宗因となりて奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す。數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を漾蕩せしめ、幽妙なる詩天地に消遙す。其源流に溯り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、繙讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしむるとを期したるは、我が『俳諧史傳』なり。之を分てば、俳人個々の傳記となり。之を綴れば、整々一卷の史篇となす。逸事あり、名句あり。一誦の下、恍々乎として、月明かに花香しき境に遊ぶが如からしめむ。若し夫れ一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確劃切なるや否やは、世自ら公論あらむ。世の文士、一本を座右に備へざる可らず。

早稻田文學評に日く、此書近年の好著、比較的に言へば、空前の好俳諧史傳なるべし、史眼の頗る潤大なる、叙事評論の其主題と相叶ふて優美、閑雅、奇警、又遒勁なる、讀むものをして卷を措く能はざらしむるの致あり。

出版發賣元　東京下六番町六番地　女學雜誌社

A COMMUNICATION.

In common I doubt not with your women readers everywhere, I have turned month by month with increasing interest to the Women's Department (of the Japan Evangelist); and though its head, Mrs. Kashi Iwamoto, was known to me only through her English writings, I cannot but share the universal sorrow for her loss. Surely this universal feeling ought to find expression in some lasting monument; and the opportunity is before us in the need of funds to rebuild the Meiji Jo Gakko,—that school so dear to her heart, and so sadly connected with her last illness. It has been suggested that a special fund should be raised either to erect or to furnish—according to the amount collected—some one building of the renewed school. Perhaps some readers of the Evangelist may help to gather this fund, in memory of one who indeed needs no monument, for " her works do follow her "

Subscriptions may be sent to the Business Agents of the Japan Evangelist, 15-A, Tsukiji, Tokyo.

Anna C. Hartshorns.

(It is sufficient for us to say that we take pleasure in heartily endorsing the proposal of the above letter. It is a call that comes to every one that sympathizes, with any sincere effort to elevate the womanhood of Japan.—Editor of the Japan Evangelist).

檄告一則

妾はジャパン、エバンゼリスト雜誌の婦人欄を愛讀して月毎に興味同情を加へたり。是れ諸し該雜誌の婦人讀者諸君が何處に於ても同感を表せらるる所ならん。此欄の主筆巖本かし子夫人さは未だ一回の面識あらず、妾は只だ其の筆に成れる英文を通ふして之を知るのみなりしが、今や夫人を失へる公衆一般の悲痛に對しては切に同感禁するゟ能はざる也。去れば此の一般の悲痛の感情は何ものか永續すべき碑銘に顯現せざれば止まざる可きをさ思はるゝ折柄、恰かも好し、夫人が心胸さ此上なく親密にして而も其の最後の不幸さ痛ましくも相關係せる彼の明治女學校の再築資本の必要せらるる機會は、如今正に妾等が目前にあり。此に於てか注意する人のありて、亡き夫人を紀念せんが爲めに特別資本を募集し、其の集り高の多少に應じて再築校舍中の一室を建設し若くは裝飾せばやさ思ひ立ちぬ。蓋し故巖木夫人の如きは、所云ゆる「遺業故人を追ふものにして」殊更に一の紀念碑を建つるの必要なきものなから、ジャパン、エバンゼリストの讀者中には、確かに此の發企に賛成して資本募集の事に助力せらるるならんさ信ず。

寄附金は、東京築地八五番八號ジャパン、エバンゼリスト事務掛に向け送附せられたし

アンナ、シー、ハーツホルン

（エバンゼリスト雜誌の編者附言す、吾等は最早多く言ふの必要なし只だ一言すれば足れり。右檄文の勸告を熱心に協賛するは吾等が愉快さする所、眞さにこれ眞實に日本の女徳を高めんさする人士が皆な耳を傾けて謹聽する所の聲なりさ。）

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日遞信省認可